新刊

池坊生花教本

下卷

特258
989

始

特258
989

新刊

池坊生花教本

下卷

大日本花道學院發行

叡山躑躅

專啓

朝鮮薊

凡例

一　本書は新刊池坊生花教本下卷として、編纂したもので、專ら高等科に屬すべき生花の實際範例圖に、その取扱上の最も重要なる事柄を詳說し、加ふるに生花に用うる花卉草木一般の自然出生及び取扱上の注意事項を附記したものであります。

一　上卷は、池坊の歷史をはじめ、華道の規矩法則並に初等科に屬すべき、生花の實際範例を示したものですから、この上下二卷を通讀する事に依り、はじめて池坊生花の一般が詳かにされるわけであります。

一　本書へ挿入の範例圖は、最も多く使用される花材を、實際に生けたるものゝ花姿につき、一技一葉をもおろそかにせず、一點一線にも細心の注意を拂つて、これを專門畫家に寫させたるものであります。

一　而して、その範例圖の配列は、之を大體春夏秋冬の順に分ち、凡そ何時の季に屬するかを瞭然たらしめ、以て池坊生花教本として、初心者の修得に便ならしめんことに努めました。

一　口繪には、華道家元池坊第四十二世專正、第四十三世專啓兩宗正の作品を、オフセット色彩刷として、錦上更に花を飾つたのであります。

一　尙、卷頭には、生花に於て最も重要視されてゐる根締の意義及び挿入上の注意などを登載いたしました。

一　附錄としての、生花に用うる花卉草木の自然と出生の月割配列の順序は傳書「草木集」に依り、之に多少の草木をも加へて百五十餘種を擧げたのであります。

新刊

池坊生花教本

下卷目次

一　根締に就て……一
根締の概要……二
一種生に限るもの……三
根締を挿合すべきもの……四
季節により根締の必要なもの……四
他物の根締を要せざるもの……五
一種生をなし得ざるもの……五
普通根締に用ひらるゝもの……六
根締として用ひざるもの……七
特種の取扱をなすべきもの……七

二　生方範例圖……九
松竹梅（一）……九
松竹梅（二）……一〇
松竹梅（三）……一二
松竹梅（四）……一三
松竹梅（五）……一四
竹に小菊……一五
梅……一七
老松に水仙……一八
梅に水仙……一九
梅に椿……二一
枝垂柳に椿……二三
枝垂柳に水仙・梅……二三
猫柳に水仙（出船）……二五
椿……二六
椿（一輪生）……二七
枝垂櫻に菜の花……二九
麻葉繡毬と燕子花……三〇
櫻……三二
罌粟……三四
葦に燕子花……三五
檉柳に燕子花（水陸生）……三六
石南花……三七
石南花……三九
牡丹……四〇
玉簪……四二
蘭……四三
芭蕉……四四
牽牛花（入船）……四五
牽牛花（向掛）……四七
曇華……四八
河骨（魚道生）……四九
海芋……五〇
蓮……五二
澤瀉……五四
女郎花に刈萱……五五
女郎花に撫子……五六
紫苑……五七
燕子花……五八

目次

秋海棠……五九
金線草……六〇
竹に中輪菊……六一
大輪菊……六二
大輪菊……六三
芒に小菊……六四
蔓梅嫌に小菊……六五
松に小菊……六七

三　生花に用うる花卉草木の自然と出生……七九

一月の花……七九
二月の花……八五
三月の花……八七
四月の花……九七
五月の花……一〇二
六月の花……一〇五

紅葉……六八
水仙……七〇
猿猴杉に小菊……七一
萬年青（八枚生）……七三
萬年青（二十枚生）……七四
黄仙蓼……七六
落霜紅に小菊……七七
梅……七八

七月の花……一〇九
八月の花……一一三
九月の花……一一六
十月の花……一一八
十一月の花……一二〇
十二月の花……一二二

終

新刊 池坊生花教本 下巻

一　根締に就て

花形の構成

生花は眞・副・體の三つの主要部から、花形が構成されて居りますから、この花形に於ける眞・副・體の三つは何れが重く、何れが輕いといふ譯にもまゐりません。眞や副の大切なる事は云ふ迄もありませんが、それ等の事のみに偏して、體卽ち根締を粗略に取扱ふことはいけないことであります。

根締の役目

如何に眞と副の部分が巧みに生けられてありましても、これに配する根締の取扱ひが惡かつたならば、その爲めに折角の花も、その風姿を失つてしまふことになります。之に反して眞や副に幾分拙い點があつても之に用ひた根

締の材料が精撰せられ、巧みな姿に取扱はれてゐる時には、それが爲めに花全體が非常に引き立ち、見榮えある物となるのであります。斯くの如く根締は、一瓶の姿を構成する上に於ては重大な役割を持つものでありますから、決してこれを粗略に扱つてはならないのであります。

根締の變遷

尤も昔の生花に於ては、根締の用ひ方が至て簡略であり、且つ極めて輕い意味に、或は添物といつた程度に取扱はれてゐたらしいのであります。生花も時の變ると共に少しづゝ變遷し來つて居るのでありまして、從つて根締の取扱ひの如きも當今は餘程改められて、その當時とは甚だしく相違せる姿をもつてすることになつてゐるのであります。即ち根締は根締その物だけでも亦三義の姿を備え、而して眞や副を受けて、十分に前後左右の均衡を保ち、立派に體としての働きをなすのであります。

根締の概要

根締の概要

我が池坊の生花では一種生をもつて本則としてありますから、或る特種のものを除く他は花物でありさへすれば、大抵一種生として差支ありませんが花のない草木卽ち實物や葉物などには必ず花あるものをもつて根締となすことが規定されてあるのであります。故に根締と稱へられるものが二樣になるのでありまして、その一つは、眞や副に用ひた草木と同一の素材を以つて體となす、所謂一種生と、今一つは、眞や副の材料と全く異つた草木を根締となす仕方であります。茲にその概要を示しますと次の通りで、これだけは生花をなす上に一般に心得てゐなければならぬ事柄であります。

一種生とすべきもの

一種生に限るもの

萬年青、水仙（節分まで）、蓮、芭蕉、牡丹、朝顔、紅葉、溪蓀、鳶尾、萱草、銀實珠、玉簪、紫苑、曼華などの類は、一種生に限るとされて居ります。

根締を挿合すべきもの

根締を挿合すべきもの

根締として必ず他物を挿合さなければならぬものは、概括して、實物や葉物の如き、花なき種類と、花はあつても賞するに足りないものなどで、即ち次の如きものであります。

松、竹、ゆづり葉、山橘、柳、虎杖、蒲、葦、芫、柏、澤水木、唐水木、川穀、芒、雁來紅、黄櫨、榛花、落霜紅、蔓梅嫌、實紫、南天、菌芋、柾木檜柏、矮檜、猿猴杉、朝鮮槇、錦木などの類。

季節により根締の必要なもの

季節により根締の必要なもの

柃、金雀花或は鷹の爪などの類は、その花の季節には一種生としてもよろしいのでありますが、花の無い季節に之を生ける場合には、必ずその當季の他の花物を根締として挿合さなければならぬのであります。

根締の不要なもの

他物の根締を要せざるもの

前述の他、大抵の花物は、何れも一種生をなしてよいものでありまして、其の種類は夥しい數に上りますから、茲には一々その名稱を擧げることを略しましたので、本書上卷並に下卷に納めた個々の範例に依つて知られたい。

一種生に適せぬもの

一種生をなし得ざるもの

春菊、初期の欵冬花、惠比根、紫羅蘭、龍膽、石竹、煎秋羅、うつぼ草、藤撫子、費菜、岩つゝじ、岩藤、荷包牡丹などの類は、美しい花を著けてもその姿が小さいために殆ど一種生をなし得ないものであります。然し、この中でも花形の小さい掛花や釣花には一種生として適當なものがあることは云ふ迄もありません。

根締に適する種類

普通根締に用ひらるゝもの

福壽草、水仙（節分後に限る）、寒菊、歎冬花、薊、仙臺萩、恵比根、金盞花、菜の花、東菊、紫羅蘭、春菊、百合、岩つゝじ、木槿、杜若、萬壽草、夏菊、繡線菊、うつぼ草、日々草、百日草、辨慶草、猩々草、石竹、花菖蒲、長春藤撫子、紅花、萍蓬草、姫百合、費菜、鳳仙花、月見草、時鳥草、刈萱、虎の尾、桔梗、旋覆花、煎秋羅、欝金蕉、川原撫子、よめ菜、菊、野菊、山梗菜、紫菜荆、龍膽、椿、茶、茶梅、爽竹柳、瑞香花、躑躅などの類は、根締として普通に用ひられるものであります。而して、その中でも、瑞香花、椿、木槿などの如く、木物の根締のみに用ひられるものもあれば、萍蓬草、杜若の如く水草の根締に限つて使はれるもの等、いろ〳〵の區別があります。

根締とせぬもの

根締として用ひざるもの

前記の一種生に限られたものを、他の草木の根締として用ひてならぬ事は申す迄もありませんが、其の他の實物や葉物として特別に扱はれる類のものも之を根締とすることは出來ないことに規定されて居ります。

特種取扱ひのもの

特殊の取扱をなすべきもの

尙其の他特種の取扱ひをなすべきものに、梅、葉牡丹、珊瑚、葉蘭などがあります。即ち

梅

梅は花物でありますけれども、その品格を尊重して、松竹梅生の他は、絶對に他物の根締としては用ひないことになつて居ります。

葉牡丹

葉物丹は花でありませんから、之を根締とすることは池坊の花則に反しますから、生花（盛花や投入では差支ない）では用ひられません。然し例外とし

て梅の根締にだけは用ひても差支ないことが許されて居ります。

珊瑚　珊瑚は、實物でありますが、その珊瑚珠の如き實を賞し、又年間僅かに幾寸しか成育せず、而も容易に實を結ばないなどの點を貴いものとして一種生として定められ、別に他物の根締を用ひなくともよい事になつて居ります。

葉蘭　葉蘭は葉物でありますが、これは一種生とした方が、十分に風情を表はし得るものでありますから、特に他物の根締を挿合さないことに定められてゐるのであります。

松竹梅（一）逆勝手（花行・眞　花器・古銅耳附壺）

松竹梅は傳花五ケ條中の一つとして選ばれ、祝儀物の第一位とされるものでありまして、正月又は婚禮の席花として專ら重要視され、其の他出產、金銀婚式、入營、出征、還暦、古稀、喜壽、米壽新築等のすべての祝儀席に生けられます。

松竹梅は本圖の如く、若松を眞として竹が小笹でなかつた場合は、眞の松竹梅であります。而して其の眞の花形の中、又眞の眞行草に分けられるのでありますが、本圖は其の中でも、花器が細口であり、眞の幹の半月が壺口以内に納まつた花形でありますから、眞中の眞の花形といふべきであり

ます。

松竹梅は祝儀花であり、且つ普通の花と異り最も正式な花でありますから、花配は眞の花配井筒を用ふることになつてゐます。井筒は普通は青竹の割つたものを用ひ、初めに向ふ側の横一本を入れ次に左右の二本を嵌め、最後に手前の一本を入れることにするのであります。

尙、松竹梅生けに於ては、花器、花臺共に圖の如く、最も嚴肅味あるものを選び用ひなければなりません。

松竹梅（二）本勝手（花形・行　花器・蓬萊）

本圖は眞副に老松を用ひ、胴に三節の竹を使ひ、梅を體としたものであります。花形は行の部に屬するのでありますが、その中でも本圖は、蓬萊の花器の鏡一ぱい迄、松の幹の半月が陽方に曲を見せて居ますから、行の草に類する挿方であります。

すべて竹は眞副體何れに用ひましても、水際一寸の中に節を見せて挿し、尙全體の節數も二節以上は必ず三節五節と云つた奇數にしなければなりません。

又本圖に於ては、胴竹の笹が體先よりも長く陰方に振り出てゐますが、これは大垂物でありますから差支ありません。寧ろこの笹の葉先が陰方に振り出てゐるからこそ、松の副との釣合がよく保たれてゐるのであります。花配は前述の如く、松竹梅生に於ては必ず井筒を用ひなければならぬことになつてゐますが、これは餘程練習を積まなければ難しいのでありますから、單に花形の練習の場合に限り、普通の又木を用ひてされるも差支ないでありませう。

松竹梅（三）本勝手（花形・行　花器・古銅壺）

梅の眞副に、竹の胴、若松の體を以て挿した行の花形の松竹梅です。この材料は、梅は男性的で千歳に緑、竹は節正で女性的、梅は香氣馥郁として寒に堪へるなどの點を賞愛いたします。松竹梅の生方は、何時でも竹を一番前に挿し、次に體の松を向つて右側（本勝手の場合）へよせて挿し、その左横に梅の眞を入れ、最後に副の梅を生けるのであります。而して竹は本圖では三節のものを選びましたが、前述の如くその最下の節は水際一寸の所に節を見せなければ

よく枝松を用ひてある事があります、これは面白くない

なりません。

尙本圖の如く體に小松を使つた場合事でありまして、必ず體眞には一本立ちの小松を用ひなければ、根締としての小松の自然が出ないのであります。すべて松竹梅を床に飾る場合は他の花を置合さぬことになつてゐますが、松・竹・梅を各々別々に三瓶に生けて、松竹梅としてこの三瓶を同時に床に飾る場合もあります。

松竹梅（四）逆勝手（花形・行　花器・青銅香爐形）

本圖は竹を眞とし、梅を副に用ひ、小酒落松二本を以て體として、逆勝手の行の眞の花形に生けた松竹梅であります。

松竹梅は他の生花と異り、眞と雖も竹を用ひてありますから、最も前に挿し、次に體先及び體眞の

小酒落二本の順序に向つて左側によせて挿し、次にその右横に副の梅を入れ、而してその後ろを並行にして留るのであります。

本圖の竹は、眞に一段、內副に一段、胴に一段都合三段の葉を以て花形を整へ、節は五節としたのであります。竹の眞の强さに應じて、體の小酒落松と梅の副の前あしらひの木とによつて、各々力の均整を保つたのが見處であります。

松竹梅（五）本勝手（花形・草　花器・古銅香爐形）

本圖は松竹梅中の草の花形で體に熊笹を用ひたものであります。斯樣に眞が老松であつても亦は梅を眞としたものであつても、熊笹またはその他の小笹類を根締とした場合は草の生方になるのであります。

本圖の場合は、體が熊笹で、胴から陰方に續いて眞の後あしらひ迄に梅を用ひ、眞の深味を見せて居ります。松は一本で眞副の整つた誠に風情のある材料でありますが、また場合に依つては眞副を二本の松で整へても差支へありません。

この花は前述の如く大體に於ては草の生方でありますが、花器が眞に屬するものであり、それに相應しい全部の花形を整へたものであるために、松竹梅生けの草中の眞の花と云ひ得られませう。尙如何に草の花形の花と雖も松竹梅は大體が眞の生方に屬するものでありますから、砂鉢等の廣口には絶對に生けぬものであります。又最も嚴肅な生方でありますから花形をはじめ花器花臺に於ても特に祝儀の意味を尊重して取扱はねばなりません。

竹に小菊　逆勝手（花形・行の眞　花器・御玄猪）

竹の生方に就ては既に上卷五八頁に於て詳述いたしましたが、本圖は竹二本を以て眞副となし、根締に小菊を挿したものです。松竹梅生けの場合は竹は通用物ですから、草と見做して絶對に前に挿さなければなりませんが、本圖の如く小菊の樣な草物と生け合せる場合は竹を木と見做して根締の小菊を竹より前に挿しても、または陰方前横に挿してもよいのであります。然し何れの場合も水際には必ず竹の根元を半分以上見せなければ、竹としての出生が表はれませんから注意しなければなりません。

本圖の眞一本は節が五節で、葉の段は眞に一段と胴に一段、副の一本は節が四節で葉が一段、全部で都合九節に葉三段の生方になつて居ります。

前圖に就て述べた如く松竹梅を別々に生けて飾る場合、竹は本圖の如き生方を以てし、根締には寒菊などのその季節の芽出度い挿花を挿し合せて、この花を中尊より向つて右へ飾ればよろしい。

梅

本勝手（花形・行の眞　花器・御玄猪）

梅の生方に就ては上卷三一、三二、三三頁に記してありますから、同時に參照されたいと思ひますが、本圖の梅はやゝ古幹の小枝の多い材料を以て、器に應じてたつぷりとした姿に生け表はしたものであります。

眞の先及び副先、陰方内副等の役枝は各三ケ所共に、ずあえを使つてありますが、本圖の如くかなり古幹を以て生けた場合は、必ず二三ケ所に極く伸び〳〵としたずあえを使用して、梅としての線の力をよく見せるやうに取扱はなければなりません。

老松に水仙　本勝手（花形・草立上り生　花器・變木二重切）

松は華道では檜・柏と共に三木の一つとして、最も雄大な感じを尊重するものであるところから、着枝の適當なものがあれば眞副を一本でしても差支へありません。これは松に限つて許されて居るのでありまして、其他のものでは一本で眞副の整ふ材料の時であつても他の適當な場所に一二本を添へて生けなければならぬことになつてゐます。

本圖の松の幹は、根元で陽方に甚だしく曲つて陰方に伸び上つてゐるから、幹の水際の邊が一

重又は二重の立上りに最も適した材料と云はねばなりませんが、斯ういふ幹の曲り工合には根締を添はせるのは非常に困難でありますから、根締の材料の選擇と餘程の技術とを要します。爰では節分後の水仙二株を根締としたものでありますが、節分後になれば自然水仙の姿もくだけて來るので、斯うした場合の根締としては至極適當であります。松の雄大さ及び曲の風情と水仙の清香さと變木の花器とで、綜合的によく調和を保つた優秀な作品として賞すべきでありませう。

尙爰に見逃すことの出來ない事は、二重の上口に何ものも生けないで、花器をよく働かせ松と水仙の風情をよく生かした點であります。眞の松が副の分れからずつと陰方へ曲を見せてゐるので、この場合上口に他の花を入れると非常に窮屈なものとなり、そのために眞の幹が働いて來なくなります。又本圖の如き生方に限らず、上口に生けるに適當な花材がなく、上口に入れたため却つて下口の花の氣分を殺ぐ樣な場合は、寧ろ下重の立上りだけとして、上重には何も生けない方がよろしいのであります。

梅に水仙　本勝手（花形・行　花器・銅蓬萊）

梅には種々なものを取合せますが、椿や水仙は最もよく調和するもので、こゝには水仙二株をあしらひました。勿論節分後の水仙で、梅の盛りを同色の配合、水仙の葉の色の取合せとで一層氣品ある花としたのであります。

本圖の眞に用ひた梅は、可成り曲があり小枝も相當についた風情ある材料でありますから鋏の入れ方にも適當の工夫をして着枝も適所々々に働かして行かねばなりません。又前後のあしらひ枝も眞

の幹の曲に添ふやうに撓めて用ひますが、之も餘り數本の枝をあしらふといふことは好ましくありませんから、胴のあしらひも眞後ろのあしらひも着枝のよいものを選んで、一本又は二本位でその枝をよく撓めそはして働かせるやうに心掛けねばなりません。副の枝も眞に相應しい古木を使つたのですが、之も副の後ろに一本他の枝をあしらつた位で生け、前あしらひは着枝を利用したものであります。

本圖では眞に相當の曲を見せてゐるのに、副の枝に餘り曲がないのでもの足りない感じがありますが、それによつて眞の曲が一層力強く見られ副の素直な氣分と水仙の根締の氣分と、花器の形とによつて全體の調和がよくとれてゐるのです。尙副の枝の中程に肘を見せて、それより上が若枝で勢よく伸てゐるところに、平凡な中に力强さがあるのであります。

梅に椿　逆勝手（花形・行　花器・銅薄端）

二月から三月にかけての生花としては相應しいものです。梅も椿も相當に强い花でありますから、花器も銅の薄端を用ひたのであります。

梅も椿もともに、この頃のものは相當に多くの花を見せます。更に又兩者とも古木のものを用ゐることは中々風雅なものでありまして、さうした取合せが、この季節の花としては最も面白く感じられませう。如何にも春の魁の氣分がよく現はれてゐて、氣品あるなかに椿の素朴さが見えて、一層いゝ花となつたのであります。

眞副の梅もよく働いて居りますが、椿の體先の働きに一層この花を價値づけてをります。尙梅は相當古木になればなる程、小枝の交叉は大目に見なければなりませんが、眞又は副のあしらひの中でも、主要枝になる可成り太い枝は曲を見せつゝ交叉しないやうに捌かなければなりません。

枝垂柳に椿　逆勝手（花形・草　花器・一重切）

一重切の竹器を用ひて、これに枯木つきの枝垂柳を眞副とし、椿を體として生けたものであります

この生方は水盤または薄端などに生けてもよいものでありますが、柳の枝振りによつては斯うした一重切竹器などによく似合ふものであります。

殊に正月は根締に白玉椿を用ひて五七日の床飾として祝儀物とされて居ります。

一重切に限らずすべて眞は、花器の中心より外づれて生けることは禁じられてあるが、本圖の如く柳などの大垂物の場合は、その限りでなく特別に許されてゐます。枝垂柳は葉が長く芽を吹いてからは餘り生けないもので、華道では三月三日の節句迄を季節として取扱ひます。そしてその中に大垂れ中垂れ小垂れの區別がありまして、爰に用ひたものは大垂物でありますが、而も兩垂物に類するものでありますから、一方に偏した垂れ方をさせないやうに、眞副を始め其他のあしらひ枝も、後ろ前各々に向つて枝先を垂らすやうにしなければなりません。

枝垂柳に水仙・梅　本勝手（花形・草　花器・二重竹器）

上重は枝垂柳と水仙、下重に梅を生けたものであります。下の梅は一種で眞副體を備へると共に全體の形としては體としての役目をもつてゐるのであります。

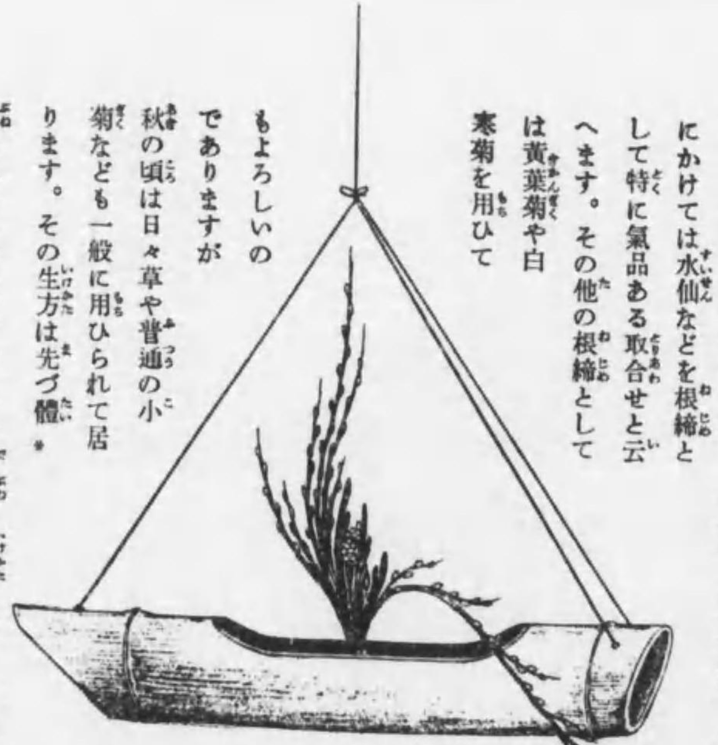
大體に二重の下口には、木物としては椿か茶梅か茶かに限られたやうなものですが、こゝには一層陽春の氣分を強調するために梅を用ひたのであります。かうした場合は梅の個性を殺がぬ樣、小さい中にも力强さを發揮して挿さなければ、梅としての位に見劣りがしますから、材料の選撰には餘程の注意をしなければなりません。

前項にも述べましたやうに、柳には大垂れ中垂れ小垂れの區別がありますが、かうした二重の上口に生ける場合には中垂れ小垂れの柳が最も適當です。相當に大垂れの柳は大作でない限りは、花形を整へるのに至難でありますから、普通の花器には不向きであります。

又枝垂柳は至つて折れ易いものでありますが、これを撓めて花形を整へるには、半日位水にも浸けずに少し弱らせて、然る後よく撓めて略ましの花形を整へてから、水を注げば自由に花形を形作ることが出來ます。

猫柳に水仙　釣生出船　（花器・竹器釣船）

この柳は山野の濕地に自生する猫柳で、莖の肌色も萠芽の色も紅味を帶びて居るので、冬から早春にかけては水仙などを根締として特に氣品ある取合せと云へます。その他の根締としては黃葉菊や白寒菊を用ひてもよろしいのでありますが秋の頃は日々草や普通の小菊なども一般に用ひられて居ります。その生方は先づ體*帆と見てよろしいでせう。尙出帆の生方に就ては、上卷四五頁金雀花の部を參照されたい。



*（根締）を入れ、次に船の艫ともいふべき眞を水際二寸位の所よりずつと艫の方へ枝先を下げて挿します。次に船の帆ともなるべき副を入れるのですが、この副は普通の副と違つて特に注意を要することは、艫の眞を除いた場合水仙の體と副の全部とで普通の置生の花形を構成しなければなりません。それで先づ副眞を眞に位させその前あしらひを胴と見做し、副の後ろあしらひで內副や副座を整へるやうにして生けのるであります。

而して本圖の花はすべて枝數を少く生けてありますので、遠き渡海の出

椿

逆勝手（花形・行　花器・御玄猪）

椿は若木と古木とで非常に風情に差のあるものです。前者は枝が相當スク〳〵と伸て威勢ある風情を見せますから、餘り曲を求めたり技巧を加へ過ぎたりしないやうに、注意しなければなりません

が、本圖の如く枝振りにやゝ古き味を持つたもの又はこれ以上の古幹のものになれば、普通で木一本、大作で木二三本をあしらつて生けるも面白いものであります。尚かうした古く寂びた材料は餘り枝數を澤山使つて葉を密集させますと、茶のやうな嫌ひを生じますから力ある幹や曲ある幹は成るべく之を見せて、各枝先又は或る部分に葉の集團を見て行くやうに心掛けることが肝要であります。要するに枝葉の集團を適所に表はして、或る所は幹だけの働きを見せるといふことにして行くのです。

本圖では、體眞や體先を可成り若い材料で體の姿を出し、眞副にはやゝ古い幹を生け合せて、材料としての個性をよく一瓶の中に表はして居ります。又本圖に於て特に注目すべき事は副の働きです副の中の方から長い枝がずつと眞の陽方へ働きかけて、眞の陽方のさびしさを補ふと共に副としての風情をよく出して居り、その枝先の開花一輪はよく利いて居りますが、實はこれは副のあしらひで、この枝の下から右へ出て居る莟をもつた枝が副眞に當るのであります。かうした場合、眞先から副先へ線を引き、眞から副への間の枝先がその線より外へ出なかつたらよろしいのであります。

椿

一輪生　逆勝手（花形・眞　花器・古銅細口）

かうした小さい細口の花器には、小品花として椿一輪生なども非常によく調和いたします。又高卓の下なんかにも相應しいものです。

一輪生のことでありますから全體の眞の長さは曲尺一尺位迄を標準として餘り丈高く生けることは

好みません。

一輪生の要領は小さい花形の中に普通の眞副體各の姿を保つて、幹に古幹らしい寂びた味を表はして落着を見せなければなりません。先づ葉と花とを以て五といふ奇數にして全體の形を整へます。枝は二本位でまとめる方がよろしいのでありますが、不可能な場合には三本を用ひても差支へありません。

向掛、横掛或は二重の上口などに於て、葉數等は一輪生の通りでなくとも、よくかうした生け方を應用したならば、非常に優美に風情あるものとすることが出來ます。

一輪生としての花器は、土器、金の類で細口のものが最もよろしいやうです。

枝垂櫻に栞の花　逆勝手（花形・草　花器・竹一重切）

枝垂櫻に栞種は一面野卑な取合せのやうでありますが、櫻の花と栞種の葉の色との取合せは野趣味な中に捨て難いものであります。

本圖では眞副に二本の櫻を生けてありますが、斯ういふ場合は成るべく着枝のたつぷりしたものを選んで、撓めてゞもその着枝を適所に配置して働かせた方が效果的です。幾本も添枝をして形を整へることは、幾ら技巧を施しても自然味にかけて損なやり方です。枝の垂れ方は枝垂柳

同様各枝の振りによつて前後左右何れに垂れても差支ありません。只柳と異ることは垂れ枝の先が交叉することを避けて、垂れ枝の集團してゐる段をよく見せる事であります。

本圖の如き花器の場合、根締又は櫻の幹等が竹器の柱にかゝらないやうに注意して生けなければなりません。姿では眞の幹の出及び眞副の太幹の分岐點から副の幹が眞の幹に添うて出てゐる工合が見所であり、副先が上の方で垂れて居るので、花器と花形との調和がよくとれてゐます。斯様に一重立上り生けの場合は、副が下から分れてずつと眞に添うて上つた氣持に見せることが肝要であります。

麻葉繡毬と燕子花　本勝手（花形・草　花器・竹器二重）

麻葉繡毬だけを上口に生けて眞副體を整へ、下口に燕子花を入れて、これも三役を見せてゐますが總體的には下の燕子花が體の役目をしてゐるのでありますから、小手毬の體は極く輕目にまとめなければなりません。

本圖の小手毬の體は枝先にも相當花を見せてゐますが、葉ばかりついた枝を用ひてもよろしい。又眞の枝先は垂物と雖も下重の窓上より下らない程度に取扱はなければなりません。副の部分にも一二ヶ所垂れた枝を見せてゐますが、かうした自然の枝が無い場合には強いて垂枝を用ひなくてもよろしい。それは眞で垂物としての姿を十分表はしてゐるからであります。小手毬は池坊では絶對に立生けにしないことになつてゐますが、置生けの場合は必ず二重の上口に生け、その他は船・月等の釣花生或は向掛・横掛等に生けるものであります。下重の根締の燕子花は體眞の苔が眞となり、その後ろから挿された二枚の葉が副座となり前の三枚組が體となつて眞副體の姿をなして居りますが、この場合その體眞の先が二重の上口より上に出ないやうに*

*注意しなければなりません麻葉繡毬は垂物でありますから、祝儀の席には一切用ひず、普通の床や連花會合の席に專ら用ひられます。

櫻

逆勝手（花形・行　花器・籠）

櫻は花の王と謂ひ又春を代表する第一位の花であり、合せて國花を代表する花であります。ですから華道では陽中の陽花として傳花五ケ條の一つに選ばれて居ります。

傳花に限らず櫻を生けるには、最も雄大壯嚴にいはゆる櫻花爛漫と形容される通り豐艶そのものの如く生けることがよろしい。假にも枝葉を淋しく扱ふとか枯枝や枯葉を見せて生けるとかいふやうなことは絶對に避けなければなりません。又すべての花を魁の意味で一月も二月も前から生けたりしますが、櫻も同樣に未だ蕾の堅いもので一輪の開花をも見ない枝ばかりのものを、櫻だとか或は傳花だとか云つて生けたものを往々見受けますが、これは意味を解しない人のやり方であつて、櫻は必ず花葉共に眞盛りの材料を以て生けなければ、その氣分が表はれないものであります。

本圖は傳花に依つて生けた櫻でありますが、櫻を生ける場合は、すべてこの傳花の如き氣分と要領とで取扱ふことが肝要です。先づ體即ち下段（胴を含む）から中段副にかけては最も開花を多く、眞はやゝ莟勝ち又は莟交りの枝を見斗ふのが直當であります。わけて眞の前胴のあたりから水際にかけては幹の肌をあらはに見せぬやうにしなければなりません。又大作物になれば青々と苔のついた洒落木を一二本も使ひますと一層雄大さを增します。花形は行の花形が最も相應しく、花器は大薄端・大壺・水盤・大籠等の總體に大花瓶が恰當いたします。

櫻には必ず松を添へて生けなければならぬやうに思つてゐる向もありますが、松を用ひて生けるのは傳花でありまして、普通には櫻だけを生けて差支へないものであります。又松を使ふ場合には、

みだりに枝松なんかを挿し合せず、必ず一本立の小松又は小じやれ松を用ひなければなりません。而してその使ひ場所は本圖の如く、一番後ろに挿して陰方に働かせるのであります。

罌粟　逆勝手（花形・行　花器・平籠）

罌粟は、その花が特に賞美されます。中々曲もあり、如何にも初夏の草花らしい朗かさをもつてゐます。

罌粟は直出生のものでありますから、眞行の花形が最も相應しいのですが、材料によつては平籠などに、行から草の花形に生けたものも風情があります。專ら賞翫用として生けられる花で祝儀の席

などには用ひませんが、平常生けて樂しむには申分ないものであります。

これを生けるには、開花は高く蕾は低く用ひ、體先は葉のみで利かせ、花は胴から上に用ひる方がよろしい。特に副の枝振りなどには注意する必要があります。

花器としては籠・土器等の輕いものが適當であります。

葦に燕子花　逆勝手（花形・行　花器・青磁平壺）

六月から七月へかけての生花として、水物は中々風情のあるものでありますが、とりわけ葦に燕子花は洵に結構な取合せであります。

眞と副とを葦で扱ひ、體と胴とに開花の燕子花を用ひて、如何にも初夏の澤池を思はせた表現であります。副は成るべく低く用ひることがこの場合肝要であります。

燕子花の根締といつても、普通に小菊などを梗を配した如く可成り長目に用ひなければなりません。

本圖は初夏の氣分を現はして居るのですが、八九月の盛夏殘暑の頃にもかうした生方は洵に相應しいものであります。而してその場合は燕子花の自然に倣つて、花を高く葉を低く生けることを忘れてはなりません。

又燕子花に副座を使つて葦の副の邊迄働かせて交生けにするのも面白い生方であります。

使ふ場合のやうに短く使用することは好みません

水草と水草でありますから丁度陸物の女郎花に桔

檉柳に燕子花　逆勝手水陸生（花形・草　花器・銅水盤）

これは陸物の檉柳と水物の燕子花とを一緒に水盤に生けたもので、これを水陸生と申します。檉柳を雄株としやゝ後ろに、燕子花を雌株として少し手前に、即ち體として生けるのであります。

犬體には、檉柳で眞と副、燕子花で體を見立てゝ扱ひますが、檉柳にも體の部分に小枝を見せて體を思はせ、燕子花にも眞副體の味を含めるのであります。これはもと立花の砂のものから來てゐますので、その心得が必要であります。

尙檉柳の水際には、必ず適宜の石を配して水陸の區別を表はさなければなりません。この場合雄株が陸物でありますから、雌株の燕子花はその個性を殺がぬ程度に餘り丈高く用ひないことが肝要であります。又この生け方によく似たものに上卷八六頁に記したところの魚道生がありますが、これは水草二種或は一種を一つの器に、眞副を雄株とし、體を雌株として一瓶の姿を整へるのでありまして、陸を表徴する石は用ひないのであります。

石南花　本勝手（花形・行　花器・朝鮮古陶）

石南花は石南花科に屬する常綠灌木で高山植物の一種であります。それだけに派出な花でありながら、相當氣品ある花でありますから、成るべく上品に生けることが肝要であります。

花は眞副體に何れも見せます。卽ち一時に開花した味を見せるのがよろしい。又眞のあしらひなどに、この圖の如く枯枝一本位を見せるのは、高山植物の風情を見せるに調和よきものであります。

尙この材料は枇杷同樣可成大きい葉を有し、各枝先に葉の集團を見せてゐますし、また幹も枇杷と同じやうに、節と節との間が相當長く灣曲に伸びて居るものであつて、至つて形の整へ難いもので

す。且つ折れ易く挽めの利かないものでありますから、眞副體各〻その恰好に適した自然の枝振りのものを選び、また葉も小じまりのものを選ぶことが肝要であります。

又石南花は主として一種生としますが、同じ灌木である躑躅などの他物の根締を配することも差支へありません。而してこれを生けるに當つては、葉の集團に對する段を奇數にする事に注意して頂きたいのであります。

石南花 本勝手（花形・眞　花器・古銅香爐形）

石南花は灌木と老木とは餘程枝趣を異にし、高山や巖壁などに成育するものは鰭屈の狀を示すものが多いので、從つて眞行草何れの花姿にも生け得られますが、就中眞の花形には至つて生け難い材料であります。然し枝振りの素直なもので葉の割合に細くよく締つた材料の場合には往々本圖の如き眞の花形にも生け得られるのであります。殊にこの圖は花器花形共によく調和した出來榮えであると謂はなければなりません。又本圖の如き眞の花形よりも、枝振りによつては砂鉢や籠等に行の草の姿にも生けられ、或は二重の上口等にも生けて殊に風情あるものであります。

牡丹　本勝手（花形・行　花器・牡丹籠）

古くから獅子に牡丹といふ取合せの繪がある位、獸王の獅子に對して、花王としての牡丹が取上げられてゐます。それ程、牡丹は花の王座を占めてゐますので、其の氣品と美麗さを賞し、華道では藤・竹と共に三通用の中に數へられ、七種傳花の一つとして特別に取扱ふことになつて居ります。

傳花では本圖の如く上段に蕾・下段に開花の二輪を用ふと定められてありますが、之は花が大輪であり極めて妖艶な花でありますから、多くの花數を用ひては却つて牡丹としての氣品を失ひ從つて變化に乏しくなりますから、蕾と開花の二輪の少ない數を以て一層牡丹の艶麗さを發揮し、單純の內に美の極致を表はさうといふ手法であります。然し傳花としての生方に依らない場合は、折角の美しい花を切落して迄輪數を少なくする必要はなく、三輪五輪又は大作に至つては七輪位の奇數に生けても差支へないのであります。

牡丹は前述の如く通用物でありますから、水際に草と見做すべき青々とした花莖又は葉莖を見せず必ず木と見做さるべき一二年立の古い莖の部分を、その一二寸の處に見せて生けなければ、牡丹の出生が表はされません。又花は成るべく同色の一種類を一瓶に生けるのがよろしいが、場合に依つては眞副を同色にして、體眞や體先は他の色の花を使つて二色を一瓶に挿し合せるも差支へありません。

牡丹は眞の花に屬して居りますから、花留も青竹等を以て井筒に組み眞の花留とすることになつてゐますが、傳花でない普通の生け方に於ては行の花留または又木で留めてよいのであります。又牡丹は花葉共に大形で掛花等には面白くなく置生に限られてゐるものであります。

尙牡丹はその德を賞揚して、この生花を床に置く場合は他の生花を置き添へないことになつてゐます。又連花會合の節には上座に置くことを通例といたします。

又生花では、他のものの根締なんかには絕對に使はれませんが、應用花としては種々の根締に使用されます。尙牡丹の生花に就ては上卷五一頁を參照されたい。

玉簪 逆勝手（花形・行　花器・青銅壺）

玉簪は花はありますが、池坊では葉を以て大體の姿を整へる關係上、葉物として取扱ふことは上卷六〇頁の銀實珠の部で述べた通りでありますが、本圖は九枚の葉を以て葉遣ひ等に玉簪の風情をよく見せ、なほ花器と花形との調和も一層よき、やゝ進んだものを示したのであります。

生方としては葉蘭と同樣に葉を以て眞副體の形を見積り、先づ眞の葉共にその前の葉を挿し、次に花二本の中、長い方の花を先に挿して眞とし、短い方の花をやゝ陽方後ろに挿して眞の陽方のあしらひの花として扱ふのであります。この花は決して副に屬した花ではありません。

花と葉との間隔は、眞の花の長さに對し約五分の四から五分の三位迄の中に葉の高さを見立てるのが適當です。全體を通じて見た場合葉の眞は眞の前あしらひに屬するもので、眞の葉の後ろ陰方に使つたものは內副に屬して見え、副體は葉のみを以て整へます。そして中段下段を葉で以てふつくらとした姿に整へるのが、玉簪の個性から見た特徵であります。ですから他の花と比較して見た場合には眞と副との間隔が遠く體と副との間は自然接近した高さになるのであります。

薊 本勝手（花形・眞　花器・古銅壺）

薊は菊科に屬し三四月頃原野路傍に自生する宿根草本で、洵に野趣豐かな草花であります。生花としては、眞・行の花姿に適し、三本より五七本迄を生けるが相應しく、花は花形に應じて適當に用ひなければなりませんが、すべて開花を高く莟を低く使ふことがよろしい。なほ根元には相當に犬葉を用ひる事が大切で、水際も割合に低くして扱はなければなりません。この根締に他の草花を使ふことは差支へありませんが、大抵一種生けにいたします。刺のある草花でありますから、幾等美しくとも祝儀の席には絕對に用ひてはなりません。

本圖は、眞の花形の中でも眞の行といふ程度で、體先と體の打込みに各開花一輪、體眞を胴に兼ねて一輪、眞の前上段に蕾一輪、眞に開花一輪、內副に一輪、副に三輪を働かせ都合九輪五本を以て生けたものでありますが、餘り美しく作り上げるよりは、成るべく枝振りの面白い材料を用ひて、野趣と雅致あるこの花の生命をそこなはぬやうに生けたいものであります。

芭蕉　本勝手（花形・行　花器・籠）

芭蕉は大葉物中代表的なものでありまして、風情から見ても個性から云つても一種變つた花卉でありますから、華道では特別の取扱ひをする爲めに七種傳花の中に入れられてあります。

芭蕉は專ら葉を觀賞するものでありますから、花季の頃と雖も絶對に花を用ひず、葉のみを以て一瓶の姿を整へることになつてゐます。これを生けるに當つては、葉の向きが惡いからと云つて容易に組替たり撓めたり出來ないものでありますから、最初によく見計つて花形を整へるに恰好の材料を選ばなければなりません、それには一莖で眞副の姿の整ふものを選び他の一莖は小さい株で胴又は體先に相應しい材料を選んで、都合二本位で一瓶の姿を整へることが最もよろしいのであります。然し場合に依つては三本位を用ひても、結局その姿は二本のもので一瓶の花にまとめたやうに見せなければなりません。圖の如く前一本の體眞及び其の中心とに卷葉を見せることもありますが自然出生を生かす手法として卷葉は眞の中心には必ず一枚は見せなければなりません。また葉數は必ず五・七・九等の奇數とし、陰の葉を一枚多く使用しなければなりません。

花器としては、芭蕉が三尺以上五尺の可成大形のものでありますから、手無き大籠最もよく土器の壺なども相應しく、置生けに限つて生けられます。季節としては專ら初夏の頃のもので、祝儀の席には用ひられません。

牽牛花　釣生入船（花形・行　花器・竹器釣船）

牽牛花は蔓物の一種で又垂物の種類にも屬し、蔓物の代表として七種傳花の一つに選ばれてゐます蔓物で垂れ下る性質のものでありますから、置生には出來難いので必ず向掛・横掛或は月・釣船等の釣生けとして取扱はねばなりません。而して蔓の上に立伸びる部分は、萩の枯枝とか竹の小枝と

かに巻き上らせて、花形を整へることになつてゐますが、これが牽牛花の個性を表はす手法となるのであります。

入船は生花五ケ條中の三ケ船中の生方であります。出船は上巻四五頁に示した如くでありますが入船はそのすべてを出船の反對に扱ひ船の舳も右へ向けて釣るのであります。

本圖は卽ち入船の花でありまして、櫓形の眞は二本の莖を以て一本の蔓を卷きつけて花姿を整へ、すつと下に垂下させます。又帆形の副は萩の枯枝に絡ませて立上らせ、體の部分に開花のある蔓を一本これも萩の枯枝に添へて挿したものですが、何れも他の支柱に蔓を卷く場合は自然に倣つて左卷にしなければなりません。釣船の場合も二重の上口と同樣に眞を除いた副體に依つて普通の花の姿を三角になつた吊紐の中でまとめるのでありますが、こゝでは副眞が眞となり、副にあしらはれた萩の枝が副座を備へ、下段の開花及び萩の枝が體座となつてゐるのであります。

牽牛花　向掛本勝手（花形・草　花器・垂撥に竹器尺八）

本圖は垂撥に尺八の竹器を使つて向掛の生方にしたものであります。

牽牛花の蔓を竹の小枝に絡ませて中程迄上らせ、眞はそれより下にすつと長く垂下させ、副先は竹の小枝で働かせ、開花は一輪を胴に使つてこゝに美の中心を求め、その下の一枝の葉を體先としてよく牽牛花の風情を表はしたものであります。

花數は傳花としては開花一輪莟一輪

し當は少々多くとも開花は一二輪に止めた方が、牽牛花としての見所でありませう。

牽牛花が六月頃から九月頃迄毎朝毎朝次から次へと咲き出でる花の勢は、誠に新陳代謝的であり、時時刻々の變化を示す天地自然の原理をなしてゐますので、吉祥の花と考へられ、祝儀の花としても生けられますが、蔓物で垂れ下るものですから、格別に改まつた席には好ましくありません。

＊がよいとなつてゐますが、場合によつては三輪五輪等を用ひても差支ありません。併

曇華　逆勝手（花形・行　花器・竹器立鶴）

曇華は芭蕉に次ぐ大葉物で、華道に於ては花を用ふる點が芭蕉と異るのであります。曇華の生方に就ては既に上卷六八頁に記述したのでありますが、本圖は眞に三枚、副に三枚、體に三枚の都合九枚の葉と花莖三本を以て一瓶の花形を整へたものであります。體の一株に就て記せば一枚の葉が

體先で、二枚目は眞の前あしらひに働き、花及び後ろに出た葉は體眞と體奥を兼ねて陰方に見せてゐますが、眞・副の株も花と葉を以てそれの〳〵の働きをさせます。斯樣に花莖三本を以て一瓶の花姿を整へることは、容易く見えて、可成り葉遣ひに苦心を要します。又水が下り易いために、みだりに葉を組替たりする事が不可能でありますから、最初によく材料の選擇をしなければならぬことは芭蕉と同樣であります。また本圖の如く花葉共に小さくよくしまつた材料は、かうした寸筒の如き花器にも生けられますが三本も使つた場合の普通の材料であつたならば、土器の壺或は籠等のどつしりした器が適當であります。

河骨　逆勝手魚道生（花形・草　花器・銅器砂鉢）

河骨は葉を以て花姿を整へますので華道では葉物として扱ひます。河骨は水草の中でも葉が特種の形をなし、又その色が暗綠色で光澤があり、花は黃色の小花であつて、この兩者の對照は如何にも氣品と落着とを感ぜしむる花材であります。

この花を生けるには開葉を三枚又は五七枚用ひ、その他は撞木葉卷葉等を適當にあしらふのですが、その要領は蓮同樣に開葉を眞副體及び眞の前後あしらひ、胴或は副の後ろあしらひ等にも使用し、本圖の如く魚道生の場合は、體眞にも用ひ、その多くは上段中段に使ふのであります。撞木葉は一二枚は上段に他は中段に用ひ、卷葉は主として下段に扱ふ

やうにしなければなりません。花の數も一株の場合は二三本位が適當ですが、本圖の如く魚道生二株の場合は五七本位迄が適當です。而して花の配置は一株の場合は眞の花を中心として前後等分に用ひるのが普通ですが、併し魚道生の場合は雄株と雌株との均整を保つために、雄株に三輪雌株に二輪或は開花と蕾を交へて雄株に五輪雌株に二輪と云つた工合に配置いたします。

葉の使ひ方は眞を中心として眞より前の葉は全部葉裏を見せ、眞より後方は全部葉表を見せます。又花は葉の和合の中から生ずるものでありませんから、葉の間に適當に挿して差支ありません。雌株の方も雄株同樣の葉遣でよろしいのでありますが、兩株共に開花は高く蕾は低く使ふことが自然に倣つた扱ひ方であります。

なほ魚道生に就ては上卷八六頁章に燕子花の項を參照されたい。

海芋 逆勝手（花形・行　花器・備前燒廣口）

海芋は普通にカラーとも稱してゐますが、本圖の材料は葉に白の斑點ある小形のもので、これをゴールデンカラーと云ひます。古くから渡來してゐるオランダカイウは、花葉共に大きく水揚も惡く生花としては前者のカラーの方が取扱よく、出生氣分を表はすにも容易であります。カラーの花は、萱草同樣葉の和合即ち中心から出ないものでありますから、必ず花莖に對して卷葉又は一枚の葉を花に背けて挿さなければ、その個性が出ません。本圖は葉十一枚花二本の二株を以て構成した一瓶で、前の小株では體先の葉より二枚目の卷葉が花に對して背を向け後ろの大株では眞と副の間の小葉が眞の花莖に背いた葉として取扱はれてゐます而して前後二株共葉組はその出生をよく表はしてゐますが、適當の葉が無い場合には、前の小株に自然が現はされてあつたならば、後ろの大株には強いて葉組の出生を表はさなくとも差支へありません。花は＊

＊萱草同樣、葉に對して矢張りやゝ高目に用ひます尙生方に於て、葉や花がバラ〳〵にとけた材料の場合は本圖の如き組合せにいたしますが、成るべくその儘に使へる樣な株の儘の材料を以て、餘り葉をほどかないで挿されるのが最も適當な方法であります。このカラーは初夏より夏季中の生花として相應しい材料で、殊に魚道生や水草との交生もよく、燕子花や河骨と同樣にその應用範圍の頗る廣いもので、主として普通の床花或は連花會合の席によく生けられます。

蓮

本勝手（花形・行の草　花器・銅器砂鉢）

蓮は七種傳中の傳花でありまして、云ふ迄もなく池沼などに發育するものでありますから、其の個性や蓮池の氣分を表現するには、本圖の如く廣口の花器に生けるのが最も適當でありまして、置生に限るもので掛花や釣花に生けてはなりません。

かういふ花は櫻の傳花同樣、俗に自然といふ發育狀態や個性を或る程度迄生け表はしたならばその他は全體の姿を見て、廣い蓮池を見るかの如き氣分を十分に生け表はさなければなりません。從つて開葉の次に花莖が出てその根元からは卷葉が生じるといふやうな、地下莖の發育狀態を生け表はすが如きことを、眞の前から體にかけて水際の邊に表はし得たならば、その他の個所はそれ程嚴密でなくとも、氣分を捉へる挿方の方に十分力を注がなければなりません。

本圖では、體先に開葉のやゝ古い朽葉を使ひ、次に卷葉を挿し、次に撞木葉及び卷葉を使ひ、次に開花を挿し、その後ろにまた撞木葉一枚を胴に使つたのでありますが、この一枚の葉は葉表を眞の方へ向けても差支へありません。次に開葉を眞として入れ、其の次に花の蕾を陰方內副として挿しその横に撞木葉を眞の後陽方のあしらひとして使ひます。尙蕾の後ろに卷葉を一枚低く體見込みとして使ひ、次に開葉を副として挿し、その後あしらひに蓮肉を裏向けて挿し添へます。以上で都合葉が十枚になりますが、陰方體の腋下に浮葉を一枚入れので全部で十一枚になつたのであります。

すべて葉は奇數を用うるのでありますが、若し浮葉を用ひられない、壺や手無大籠などの花器に生けた場合は、眞副體の中何れかに葉を一枚增して必ず奇數にすることを忘れてはなりません。

假に浮葉を除いては、開葉は眞副體の三枚に限られ、この體の葉を過去とし、眞副の葉を現在とし卷葉や撞木葉を未來と見做すのであります。又開花は現在であつて下段に用ひ、蕾は上段に使つて

未來とし、陽方の蓮肉を過去と見做すのであります。他の多くの草木は花季と結實季とは甚だ期間のあるものでありますが、蓮は夏中花が盛りであるばかりでなく、實をも生じ、又葉も芽葉、新葉古葉を共に生じ、短期間中に移り變る自然の樣を現出するものでありますから、一瓶の生花にもこの姿を寫して過去、現在、未來の世界を表現するのであります。

蓮は、たとへ水草と雖も生け交へないことに定められてゐます。又餘り佛教的に緣の深い花でありますから、祝儀の席には用ひられず、從つて佛事關係の席に多く生けられます。

澤瀉　本勝手（花形・行　花器・銅器廣口水盤）

澤瀉は水物でありますが、大體葉物として扱ひますので、葉數は必ず奇數にしなければなりませんこゝには九枚の葉と花二莖とを以て生けました。勿論七八月頃の花のある時だけを賞美して生花に用ひます。横に廣く繁茂する草でありますから、行・草の花形に生けるが相應しいのであります。

生方は大體に於て、前掲の海芋同様に大小二株を相前後させて一瓶の姿を整へます。大株の方は花を眞に見て、その前後にあしらひ葉を入れ、

次に副は葉のみを以て整へます。而して葉は花を中心として前に使ふ葉は裏を見せ、後ろに使ふ葉は表を前に向けて用ひます。前の小株の方も葉の使ひ方は大株同様に取扱ひますが、この小株では花を體眞位に見て、その前後の葉は眞の前及び下段のあしらひ又は體先

この花も海芋や河骨同様に他の水草と生交ぜて使はれますが、かうした一種生けも水盤などにはよく調和して、夏季の花としては頗る趣きのあるものであります。

體見込等に働かせるのであります。

女郎花に刈萱　本勝手（花形・眞　花器・銅四方口）

女郎花と刈萱とを交生にしたものであります。この場合は、圖の如く女郎花だけを眞と體の形に見積りまして、その中に眞の陽方後ろあしらひのもので女郎花としての副座を輕く見せて、先づ女郎花だけをまとめて挿し、次に刈萱は眞の後ろから内副にかけて挿し、次に刈萱だけを副として挿します。而して副は刈萱のみを以て働かしたものであります。

この場合、女郎花は女郎花として又刈萱は刈萱だけでも、眞副體を輕く形づくる程度に見せて女郎花を前に刈萱を後ろに重なるやうに挿し、全體で完全な眞副體の一瓶の姿を生け表はすのであります。

かゝる材料で花を澤山用ひて生けることもありますが、本圖の如く小數の材料で而も瀟洒な姿に生けることは、花器花姿共に調和よく物淋しい秋の深さが想起させられます。

女郎花に撫子　本勝手（花形・真　花器・染附磁器壺形）

女郎花の生方に就ては既に上巻八〇・八一頁（参照）に詳記しましたから爰には再記いたしませんが本圖の女郎花は莖が極めて風情に乏しい眞直ぐな材料ばかりですから、小花瓶に眞の花形に生けたものであります。

女郎花一式を生ける場合は、體の使ひ方に非常に工夫を要するもので、その出生を表はすことが至難であります。かうした場合には、他の適當な草花を根締に用うることがよろしいのであります。

ですから本圖では、女郎花の花色の強い感じを柔ぐために、花器も染附の磁器にして、根締には極く淡いピンク色の可憐な河原撫子を挿し添へました。而して撫子の根締は女郎花に對しては上段中段から使ひ下すといふよりも、主として下段に用ひる方が相應しいのであります。

この花も秋の野趣を味ふに最も好適の花といはねばなりません。

紫苑　逆勝手（花形・行　花器・青磁壺）

紫苑は上巻七八・七九頁（参照）に於て既に述べた如く、華道では葉蘭同様に大葉物として扱ひますですから大體に於て五、七、九、十一、十三等の奇數の葉を以て眞・副・體の役を整へ、花はその自然出生を寫して特に高く用ひるのであります。

本圖は花二本葉七枚を生けた姿で、花より前に眞の葉、體の葉、及びあしらひ葉

*二枚の四枚を、何れも葉裏を前にし、花より後ろに內副、副、あしらひの三枚を葉表を前にして使つたものです。而してこの陰の葉四枚陽の葉三枚で花莖二本を圓く圍ふやうに挿すのであります。

花がすつと高い爲めに眞と副との間隔が遠く副と體との間隔が近くなることは、つはぶきや銀寶珠などと同じ使ひ方でありまして、かうした花形がその材料各々の發育狀態から見た個性を尊重してその氣分を發揮するに最も效果的であるのであります。

紫苑は上巻にも述べた如く、葉物で而も紫色の花をつけ、殊に普にしの字がつく處から、緣起上祝儀の席には生けられません。

燕子花 逆勝手（花形・眞の草　花器・銅器環附）

本圖は燕子花の初秋に於ける氣分を生け表はしたものです。燕子花は上卷にも詳述した通り、春から夏、秋へと自然上に著しい變化を來すものでありますから生花に於ては最もよく其の自然に倣つて、その風情を寫すのでありますが、秋になりますとだんだん花が伸び上つて葉よりも高くなりますので、この頃の花は葉よりもやゝ高く使つてその氣分を強調いたします。又成るべく着葉をよく利用して、葉數を比較的少くすつきりと瀟洒に生けることが秋の氣分を表現する上に於ける第一の手法です。尙一瓶の中に一二枚の先枯の葉或は垂葉を見せることも面白いものであります。

本圖では、胴の下段の個所に開花一輪を、葉の中に入れ交ぜて見せた所に妙味があり、而も三輪の花が各〻異つた咲き方を見せて居るのも亦一入風情を増して居ります。

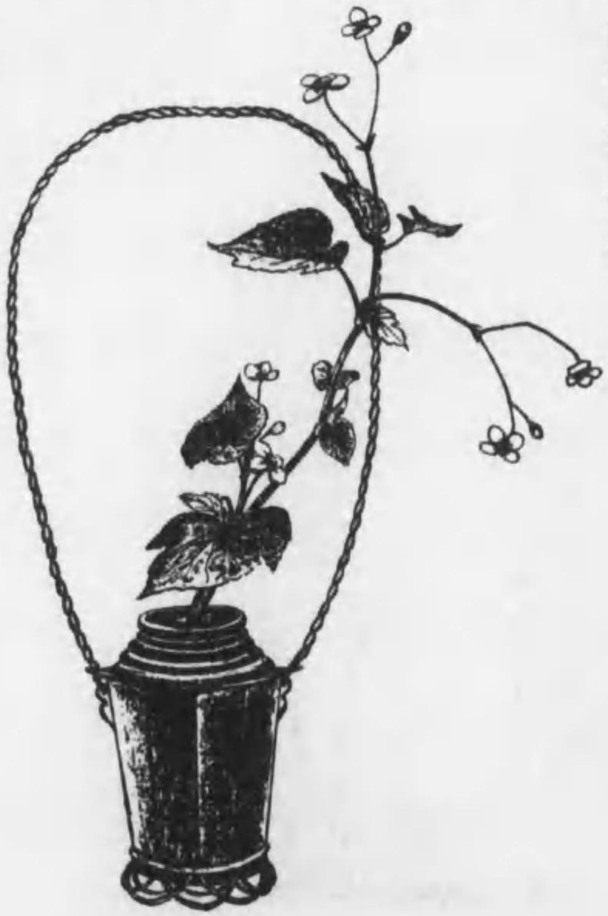
秋海棠 逆勝手（花形・行　花器・手附籠形向掛）

秋海棠一種を極く自由な手法に生けたものであります。

普通ですと、手附の花器の場合は、花がその手を見切らぬ樣に、手の中に納めるのでありますが、こゝでは行の花形として、二本の材料で役枝一切を兼ねさせてゐます。

掛花に限らず置生又は二重の上口・下口（この場合は主として根締）等に生けるにいたしましても、斯樣に少ない枝數で着枝を利用して、眞副の姿を整へることや、又體は下葉の大きいもので、その力を表はしたりすることは、この花材の使ひ方及び花形を整へる上に於て最も大切な手法であります。

又材料の風情から申しましても、秋海棠は洵に可憐な女性的な花でありますから、これを生けるに當つても、餘り枝數多くを用ひないで如何にも優美に枝葉を生かして生ける事が肝要であります。



金線草　本勝手（花形・草　花器・竹器一重切）

金線草は普通水引草とも書きます。洵に女性的な花でありますが、爰には一重切の竹器に一種生として扱つて見ました。

眞の花が、一重切の上の節の邊から曲つて、その先が花器の中央の位置に立戻るやうに生けることが肝要です。この立上り生では花器の側面に柱があり、それをよけて眞副を立ち上らさねばなりませんので、眞の枝には相當に曲を要します。而して副は眞の後ろに挿して前隅へ振り出し、體は體眞のみを眞に添はせて上し、その他は窓の中にをさめ*

他に特別な注意事項もありませんが、花は大して美麗でなく、只その限りない野趣と莖の線條美を賞するのでありますから、その氣分をよく生かすことに心懸けねばなりません。

尙この花は常の賞翫用で、祝儀の席には生けません。

*る事を普通といたします。水引草の生方としては、其

竹に中輪菊　本勝手（花形・行　花器・御玄猪）

竹は四君子の一つで節の正しいところを賞して四季を通じて生けられます。それで婚禮その他の祝儀の席などに、他に目出度い花としての材料がない場合は、何時の時季でも、竹にその季節の芽出度い美しい花を根締に挿し添へて用うればよろしいので

竹の生花は至極重寶なものであります。

爰には初秋の祝儀花として根締に中輪菊を配したものであります。中輪菊を根締とする場合は眞副が竹*輪菊としての力が殺がれますから、小菊よりは幾分高く用うる事が肝要であります。

*であつても、比較的長く中段位から體先に及ぶやう使はなければ、中

大輪菊　本勝手（花形・眞　花器・竹立鶴）

菊は菊科に属する多年生草本で、畏くも我が皇室の御紋章に選ばれてゐる程に、頗る美しく氣品高いものであります。その種類は頗る多く細別しますと數百種にも及びますが、之を大別して大輪菊中輪菊・小輪菊の三つとし、大體に單瓣と重瓣の二樣に見ることが出來ます。花の色には白・黄・紫・樺・茶褐色或は斑入など種々ありますが、古くから、『黄菊白菊其他の名は無くもがな』と唄はれてゐるやうに、其の原色は黄色であります。而して菊は最も優秀なる花の咲く秋を以てその季節といたしますが、この他に春菊・梅雨菊・夏菊・野菊・寒菊など殆ど年中を通じてあるものであります。菊は眞行草何れの花形にも生けられますが、其の自然の姿から見て大輪・中輪のものは眞又は行の花形に適し、小菊や野生的な材料で自然に垂れたもの等は、掛釣等の草の姿に生けると相應しいものでありますから、之を生けるに當つてもその意持で取扱はなければなりません。

本圖は大輪菊の出初めのもので、菊の氣品や威嚴を表はすために極めて少ない枝數で、立鶴の花器を選んで眞の花形にまとめたのであります。即ち前一本で體、後ろ一本で眞副を整へ、眞に開花を利かせ、副體は蕾又は半開を以てし、胴及び水際等には大なる葉を利かせて、都合二本五輪で、すつきりと一瓶を整へたものであります。

大輪菊　本勝手（花形・行　花器・御玄猪）

大輪菊は前圖に於ても述べた如く、その花形としては眞又は行に適するのでありますが、就中行の花形が最も相應しいのであります。花器には銅器、陶瓷器、籠等何れを選んでも、調和のよいものであります。

本圖は大輪の二輪着のもの九本を以て生け、花を十七輪とし、眞を中心に前後八輪宛等分に配置したものであります。秋の最中となつて菊の眞盛りには、斯樣にたつぷりした材料に十分の力を見せて、賑やかな中に清楚な氣品を傷けぬやうに心して生けるがよろしいのであります。

元の莖の都合でさうされることもありますが、本圖の場合

茎では副が、標準の割出しから見ますとやゝ高く使はれてありますが、これは根は、この副の高くなつてゐる處に引締つた上品さが見られる花形であると云ひ得られませう。菊は我が皇室の御紋章に選ばれ、其の品位萬花に優れて居りますので、祝儀の席に最も珍重せられ其他如何なる場合に生けるも差支ありません。

芒に小菊　本勝手（花形・眞の草　花器・竹器立鶴）

芒は本圖の如く穂が出ると尾花と呼ばれます。この穂は云ふ迄もなく芒の花ではありますが、餘り美しからざるところから、池坊では穂の出た時と雖もこれを花として取扱はず、必ず他物の花ある草花を根締として挿し添えることになつて居ります。又芒は葉が垂れるので垂物として取扱ひます而も前後何れかの或る一方にのみ偏して垂れますから、片垂物として取扱はねばなりません。

本圖では、眞に穂のよく開いたものを使ひ、内副陰方に穂の出かゝつたものを一本添へ、副には葉のみのものを用ひ、眞の前あたりは眞に着いてゐる前の葉を十分に利かしてあしらつてありますが、斯樣に三本位で生ける場合には眞の前の着葉は特に大切に捌かなければなりません。根締には小菊の外野菊、撫子、仙翁、日々草等いろ〳〵使はれますが、其の他女郎花、桔梗中輪菊等の如く可成り長く發育する下段物でないものは、芒に對しては上段又は中段位の所から用ひて交生にいたします。

秋草と云へば直ぐ尾花が連想される位で、秋草の中でも他の草花より高く抜き出でゝ穂を出しますところから、草物の立華の場合でも上段の眞副等に使はれる位ですから、他の材料と取合せる場合も必ず眞副に使つて、他の草花は中段下段として前に使ふことになつて居ります。

尙本圖で注意すべき事は、花器が眞の花器で花も眞の花形に近いものでありますが、材料が垂物でありますから、この場合は眞の花形と見做さず、草の花形と見做すべきであります。

芒は垂物でありますが、生花は置生に限り掛釣などには絶對に生けません。

蔓梅嫌に小菊　逆勝手（花形・草　花器・竹器二重）

蔓梅嫌は山野に自生するもので毎年五月頃伸びて他物に卷絡し、六月頃蔓の小枝に小花を開き花後豆大の實を結び、十月頃黃色となり、外皮破れて赤色の實を露出しますが、その頃に至りますと落葉して實のみ殘り頗る美觀を呈します。

蔓梅嫌はこの珠玉の樣な實を賞する材料ですから、華道では實物とも見做し蔓物として扱ひます從つて二重の上口及び掛花、釣花等に專ら草の姿に生けるのでありますが、この場合眞又は副の部分に可成太い幹を用ひ、それに細長く伸びた蔓を左卷に卷きつけ、その蔓先は出來るだけ自然らしく

奔放的な線條美を見せて氣分を出すことに力めなければなりません。又着枝の蔓狀をなしたものは共に卷き合せて形を整へるもよく、尙親幹とする太い枝の無い場合は、細い蔓幹同志を二三本も卷きつけ合せて姿を整へます。

蔓梅嫌は花物でありませんから、必ず他の草花を根締として挿し合さなければなりません。而してその根締は、蔓梅嫌が極めて野趣的なものでありますから、根締の材料も野菊、白山路菊、撫子、龍膽等の如き野趣豊かな材料と取合せる事がよろしいのであります。

松に小菊 逆勝手（花形・行　花器・竹器眞鶴）

松一本で眞と副とを見立て、小菊を根締として體を整へたものであります。本圖の如きは花器花臺共に初秋中秋の季節に於ける祝儀花として相應しいものであります。殊に材料の松が老松でなく可成若々しい松ですから幸先を祝ふ場合の床花としては最も相應しい花であると云へませう。又冬季正月等には根締として寒菊、白玉椿等を用うれば結構です。

圖の如き眞鶴の花器の生方は、一重切同樣の生方でありますが、柱がありませんのでその生方は比較的容易であります。眞の下段の幹は必ず前に振り出さずとも差支ありませんが、副先は後から出して必ず前角に振り出して用ひます。殊に松の如き一本を以て眞副を形作る場合、その副の出は前から出てゐても差支ないことになつてゐますが、副の中の着枝をもつて副座として、後ろの方へ一枝働かせることが肝要であります。

紅葉 逆勝手（花形・草　花器・平籠）

櫻は春を代表する花であり、紅葉は秋を代表するもので、照葉の美しさが萬木に勝れて花同樣の美觀を呈するものでありますが、櫻が陽氣と華やかさとを背景にその美を發揮するに對し、紅葉は美しい中に靜寂の極致を表はすものであります。斯樣な關係で紅葉は傳花五ケ條中の一つとして特別に一種生とされることになつて居ります。

秋になつて楓が紅葉するのは山のものより漸次里のものに及ぼし、一本の木でも陽當りのよいそして雪霜を受ける部分より紅葉を始め陰の部に及ぶのであります。それで之を生花とするに當つてもこの自然を寫してこそ紅葉の個性や風情を現はし得るものであることを知らねばなりません。而して之が取扱ひを巧みならしめやうとしますには、第一に材料の選定に意を注がなければなりませんが、大體に於て眞は濃紅なるもの、副は濃紅にして尙散り殘りの葉の少々ついた位のもの、體は黃葉、青葉勝ちのものといふことを考慮して、それに適應した材料を選ぶがよろしいのであります。

なほ老木を始め他の曲ある枝にもそれ〴〵によく寂びた材料を選んで、面白い枝振りの箇所は其の曲を表はし、水際より胴にかけて十分に葉を使ひ、他は各所に葉の集團を巧みに使ふやうに心懸けなければなりません。

又櫻に苔木を用うるが如く、紅葉には曝木を使ふのでありますが、それは中段に用ひて水際よりあらはに見することなく中段の葉の間から表はすのであります。

紅葉は前述の如く花にも勝る美しさを有するものでありますから、特に一種生が許されてゐるのでありますが、春先の青紅葉を生ける場合には*

として生け又連花會席等には生けられますが、元來花物でもなく、殊に落葉間際のものでありますから、祝儀の席に用うることは宜しくありません。

* 必ずその季節の花ある草木を根締に用うることを忘れてはなりません。

紅葉は主として置生に平常の花

水仙本勝手（花形・眞　花器・竹器鼎形）

水仙は七種傳中の傳花でありまして、その發育狀態が一般の花卉と非常に異る關係上取扱ひも變りまして花姿も特種の生方をしなければなりませんので、傳花として選ばれてゐるのであります。

季節から申しましても、陰の時季である冬の頃から早春迄を花の季節とし、葉も相對して發芽しつつ一般に四枚を生じるのが通例で、球根の大小によつては三枚又は五枚等の奇數になるのもありますが、これは極めて稀であります。又花もその多くは一花莖に六輪を生じ、各一輪の花瓣も六瓣からなつてゐます。發育も濕地を好み所謂陰地に自生いたします。斯樣に成育の土地季節から花葉の數も陰數で、すべての條件が、華道で云ふ陰に屬したものばかりでありますから、この花をして陰中の陰とし、陰の花、水仙に限ると迄謂はれてゐるのであります。

水仙はその出生に倣ひ、置生を專らとして向掛にも生けますが、餘り傾斜した使ひ方をなす横掛釣花等には用ひません。生方は二株生又は三株生に限られて居ります。而して一株に對し前後二枚宛四枚の葉を組んでその中心に花を挿すのでありますが、さうしたもの大小二株で一瓶を整へ、或は大中小三株で一瓶を生けたりするのであります。

本圖は水仙の初期の事ですから二株とし、花器も亦輕く見せる爲めに鼎形を使つたのであります。

總體に初期の頃は二株が適當であり、中期以後盛期になりますと、三株の花形が相應しくなるのであります。又節分後の所謂殘花の頃に至れば三株生の體の一本を外して、それに金盞花、欵冬花等の倭少な草花を根締に添へて生けられます。

水仙の生方に於て普通の生花と異る點は、その自然に倣つて副を眞より前に振り出すことであります。水仙の葉はすべて後ろを高く前を低く使ひますので、二株生に於ては圖の如く、後ろの一株では後方の長い葉を眞とし、前面の短い葉を副に見立て、前の一株では後ろの長い葉を胴に見立て、前の短い葉を體として生けます。隨つて三株生けに於ては、普通の生花の如く、副を後ろに挿すことは、短い葉が後ろに使はれて出生にそむくことになりますから、この場合副の一株は眞の株より前に生ける規定になつて居ります。

花は開花を高く蕾を低く用ひねばなりません。尙初期は幾分低く、盛期にはやゝ高く使ひますが、すべて各一株の中の一番長い葉より上に伸び上げて高く使ふことは絶對に出來ません。

水仙は陰性の花でありますが、極寒を堪へ忍んで陰から陽にかけて咲き出る勢力を有し、又花は芳香馥郁として氣品高く、花姿は陰陽を完全に兼ね備へたものでありますから、之等の點を賞美して祝儀の席に用うることになつて居ります。

猿猴杉に小菊　本勝手（花形・草　花器・塗物廣口）

猿猴杉は上卷七二頁にも記した如く、常綠の垂物で、葉と枝條の美を賞するものでありますから、この生花には必ず當季の草花を根締として挿し添へなければなりません。四季を通じて生けられますが、一般には秋から冬にかけて多く用ひられてゐます。

これを生けるには紐狀をなした細長く立上つた枝を、なるべく必要の部分だけ殘して、その他の横に出た多くの小枝は思ひきり切り落して、猫柳同樣にその線條をよく活して花形を整へます。尙猿猴杉は垂物で、四方何れの方にでも垂れますので、兩垂物として中段以上の箇所に一二箇所の垂枝を見せます。大作物には垂枝、磨き枝共に五七ケ所も垂らします。然し何れの場合にしても、垂枝を三ケ所に見せる事は三（身）垂れと云つて忌み嫌はれますから注意しなければなりません。猿猴杉は眞行草何れの花形にも取扱ひますが、只垂物であるだけの事で大體は直出生のものでありますから、蔓物の如く九十角度以上に垂らすことはいたしません。其の他に就ては、上卷七二頁を御參照下さい。

萬年青　本勝手（花形・草　花器・磁器水盤）

萬年青の大體の取扱生方などに就ては、上卷九五頁に記述いたしましたので爰には圖に對する生方を記します。

本圖は八枚生であります。先づ一の前葉の中から二の流葉を生じ、二の流葉の中より三の葉を生じて胴に働き、三の葉の中より四の葉を生じて流のあしらひ葉卽ち體見込みとして働きます

次にこの四枚の中より五の葉を生じて露受葉の後あしらひに働き、この葉の中より六の葉を生じて立葉の後あしらひ卽ち普通の生方の場合の內副の働きをいたします。尙六の葉の中より七の立葉が生れ、七の葉の中より八の露受葉が生じます。斯くの如くこの場合八の葉が、一番最後に而も最も中心に挿されてゐてこそ、露受葉としての役目になるのであります。

斯うして次々に、一枚の葉が中心より生れ出るのでありますから、生けられた姿も葉の重り工合もすべてその心得で取扱はねばなりません。爰では一から

四迄が古い葉で、五と六の葉は翌年の新しい葉に當りますので、自然と横に葉の出方が變り、その中から七と八の葉が生じますから、五六七八の四枚は新しい葉であり、わけて七八の葉は最も若い葉であるべき筈です。從つて去年と今年との區別が判然いたしまして、花莖はその境に生じて來るのでありますから、所謂立葉七の葉裏に實を挿すことが出生に叶つた生方であります。

萬年青 本勝手（花形・草　花器・銅器足附水盤）

本圖の十二枚生は大體に於て、前圖八枚生同樣の生方でありますが、只異ることは二年生迄は六枚の葉が出た中から今年四枚の新しい葉を生じたといつた見方の生方です。それで新しい四枚の葉は立葉の前あしらひと、立葉の後あしらひの葉より後陰方に挿された一枚の葉と、この二枚の中から八枚生と同樣に四枚の新葉が出たものと見做します。實はこの場合と雖も矢張り立葉の背に入れるのであります。萬年青は、生花では實を以て第一賞美いたしますから、この珊瑚の如き色を成した實の最も美しい時季に生ける事が、萬年青を生ける正しい季節とされてゐるのであります。從つて若し實の無い場合や實の青い時季に、祝儀用として是非生けなければならぬ場合には、造り實を用ひて生けても差支ないことに定められてをります。

又萬年青は御玄猪や薄端などの、すべて背高く美しい花器に生ける事は好みません。寧ろ丈低く佗しい器が適しいのです。壺の類にしましても幅廣く丈の低い形の器であれば差支へありません。

萬年青は陰性のものであり實物でありますが、その生育狀態が規則的で、實に秩序正しく成長するものでありまして、年々新しく生れ出る葉が高く伸び上るにつれて、老葉は漸次垂れ下がつて其の位置を變へること、恰も一家相續の意を偶し、而もその名の如く永久に綠葉が青々として枯るゝことなく、また眞紅の實を生ずること子孫繁榮を象るものとされてゐるところから、祝儀の花として婚禮の席を始め總ての賀席に喜ばれるものであります。

黄仙蓼 逆勝手（花形・行　花器・蓬莱）

黄仙蓼は、莖葉共に既に上巻に於て述べた赤仙蓼と、個性上何等變るところがありません。從つて生方に於ても異つたことはありませんが、たゞ莖頭の實が赤仙蓼は赤色で、黄仙蓼は黄金色をなして居るだけのことであります。

本圖は、上巻九三頁に示した仙蓼の圖に比較して、やゝどつしりした強い器を用ひました關係*

*上、素直な若枝ばかりを可成り豐富に使つて生けたもので

あります。その生方取扱などに就ては上巻九三・九四頁を參照して頂きたい。

なほ仙蓼は成るべく水際から中段にかけては莖を見せないやうにたつぷり葉を繁らせその繁味の中に實がよく表はれるやうに捌いて形を整へることが肝要であります。

本圖は花姿、花器ともによく調和のとれた花形と云ひ得られませう。

落霜紅に小菊 逆勝手（花形・行　花器・銅器壺）

落霜紅としては、本圖の如き枝振りのものは極めて稀に見る好材料であります。從つて花形も優秀のものと云ひ得られます。

落霜紅にはよくかうした曲のある枝が多く、又鋸や鋏を入れて多少の曲をつけることは容易でありますが、この梅嫁は紅葉以上に幹が折れ易く撓め難いものでありますから、本圖の如き好材料としての枝振りはなくとも、*ふやうな材料を見立てなければ眞副其他のあしらひと共に假にも撓めて形を整へるといふ自然の枝振りを以てよく添

やうなことは、餘程技術が進んでからでないと困難であります。

落霜紅は、秋から冬にかけて實の紅熟する頃を季節として賞美する實物でありますから、これを生けるに當つては、すべてその季節の花のある草木を根締として用ひねばなりません。根締としては小菊の外龍膽、白寒菊、黄寒菊、椿、茶梅等が相應しいものであります。

尚落霜紅の生方取扱などに就ては、上巻九〇頁を御參照下さい。

梅

本勝手（花形・行　花器・青銅四海波）

本圖の梅は、十二月頃の未だ十分花の咲き出でない初期のものを、一二輪の開花を愛でゝ一種生けとしたものであります。

この材料は相當小枝の多い古幹でありますから、それを利用して梅林を想起するかの如く、枝を相當賑やかに扱ひながら花器との調和を計り、極めて鋭角的な氣分に花姿をまとめて見ました。既に梅の生方に就て記述しましたやうに、大きな幹其他の役枝の交叉は好みませんが、かういふ場合に於ける小枝の交叉は、極めて大目に見て、所謂梅らしさを一層よく發揮するやうに力めなければなりません。正月の松竹梅飾りの中、松・竹・梅を各々一瓶宛生けて松竹梅として同時に飾る場合、本圖の如き生方をなし、松を中尊として、この花を向つて左側に飾るのであります。

生花に用ふる花卉草木の自然と出生

――月割配列の順序は傳書「草木集」に依る――

一月の花

松（まつ）

松には男松（黒松）女松（赤松）、五葉松その他色々あり、若松、老松などの別もありますが、その何れも生花に用ひられます。就中黒松や赤松は最も雄大でありまして、萬年に綠葉をたゝへ剛幹凜々しく男性的でありまして、萬木の王としての氣品と權威を具へて居ります。

華道では、松・檜・檜柏を三木として常綠樹中最も品位あるものとして尊びますが、松はその第一位にあり、不老長壽・千歳の操などを尊びます。

松は年中何時にても生けられます。祝儀第一の松、竹、梅には缺くことの出來ない材料です。松一種生けには花物の根締を要します。花形は眞行草何れの花形にも生けられますが、概して若松は眞に、老松は主として行草に生けられます。

梅（むめ）

梅には種類多く、普通の梅、紅梅、早梅、冬至梅、臘梅、臥龍梅、八朔梅等が算へられますが、何れも生花の素材として用ひられます。梅は里より山に、下枝より上枝に及び又陽うけの枝から咲き始めますので、その花季は相當に長いものであります。鐵幹雄健にして男性的であり、年々數尺に及ぶ壽榮を多數生じ、枝は直角に出で多く交叉するのが、梅の特徴であります。花は極寒を耐えて萬花に魁て開き馥郁たる香りを放ちます。されば氣品、香氣及び忍耐の德などを尊び『花の兄』と稱へ賞づるものであります。

梅は種類によつて花季を異にしますので、その季節々々

生けられますから、各種を通じては相當長期間に亙り用ひられます。花形は眞・行・草何れの花形にも適しますが概して若木は眞・行に老樹は行・草に生けて相應しいものであります。而して花はその自然に倣つて開花を中段及び下段に見せ、上段は蕾勝ちとして風情を表はします。松竹梅の一種として大切な素材であり、梅のみを生けること多く、又他物をもつて之が根締とすることも差支へありません。

尙種類の主なるものに就て、花季、特徴などを記せば次の通りであります。

冬至梅は、普通の梅の一種で、すべて白花であり、冬至の頃から咲き始めて春に至つて盛りとなります。而して一時に多く開花しないのがこの特徴であります。

早梅は、早いものは七八月の頃から點々と花を見せ、十二月迄續いてなほ春に迄殘花を見せる程であります。されば此の梅の花季は秋から冬迄であり、葉の間に花を見るのが特徴であります。

臥龍梅は其の名の如く枝に甚だしく曲あり、雅味豐かなものであります。

臘梅は四月頃發芽し、十二月頃から春にかけて花をつけますが、花は黃褐色で非常に香氣の高いものであります枝は折れ易いものであります。

水仙（すゐせん）

水仙は、石蒜科に屬する陰性の多年生草本でありまして濕潤の地を好んで生育します。その產地は極めて廣く、我が國至る處に育つことは云ふ迄もなく、支那、歐洲にも產し、世界中殆ど水仙の產しない處はないといふ位でありますから、從つてその種類も多く三十餘種に及ぶ程であります。

花は白黃を主とし、大輪、小輪、單瓣、重瓣等の別があります。然しその原種は白色の一重咲きで中央に黃色の盞形の蘂を持つたものでありますが、多くの水仙中この種が一番品位もあり、色澤、芳香もあり、その上發育狀態も最も規則的であり、且つ花葉の質が極めて素直であります。ですからこれ等の點が生花の素材として最も珍重される所以であります。白色單瓣に次ぐに白色重瓣を以てしますが品位としては單瓣のものに比し遙かに落ちるものであります。また黃水仙もその花の姿は決して惡いものではありません。

水仙は、霜雪を凌いで嚴寒中に花を開き、殊に氣韻ある姿、馥郁たる香氣、整然たる花葉何れも捨て難い特徴を有し、名花として推賞するに足るものであります。されば華道に於ても之を七種傳花の一つに算へ、特種の取扱ひをなすことになつてゐるのであります。

水仙は土地によつて幾分花季を異にしますが、普通舊曆の十一月頃から翌年の二月までとするのが一般でありませう。從つてこの季節に先だつて開くものを華道では珍花とし、季節後のものを殘花として取扱ふのであります。

水仙は自然に備はる氣高い品位を尊重して、必ず一種生けをなすことが本則となつてゐますが、その崇高な季節を過ぎたもの、卽ち節分後の殘花期のものは、普通の花同樣に見做し、他物の根締にこれを用ひ、或は水仙に他の草花を配するも差支へないとされて居ります。

ゆづり葉

ゆづり葉は山中に自生する常綠喬木で高さ丈餘に達し毎春枝頭に新芽を生じ、而して古葉が落ちるので讓り葉の名があります。さればこの相續の意を偶するので、芽出度いものとして正月三ケ日の花とされてゐますが、また何時生けても差支へはありません。姿は眞・行・草を通じて生けられますが、枝に曲が多いので可なり生けにくいものであります。

常綠樹でありますから、これを生けるには必ず他の花物を根締として生け合さなければなりません。而してその根締には、椿の外は大抵草花に限るとされて居ります。

前述の意味からしまして、正月床の外、相續を祝ふ席上などに最も喜ばれる花であります。其他の普通の席にも勿論生けて差支へありません。

寒菊（かんぎく）

寒菊は、十月頃から一月頃にかけて花を開く菊の一種でありますが、その花は極く小さい可憐なもので、白・赤・黄などありますが、霜のために紅葉した一莖を採つて生花とした風情は格別であります。而して生花としては、一種生けもよく、他物の根締としても用ひられます。

山橘（やまたちばな）

山橘は仙蓼によく似たもので、山野に自生して高さは尺餘を普通といたします。毎春新芽を出して小花を開き、秋の終り頃赤色又は黄色の實を結びます。生花にはこの實の頃を用ひますので、必ず金盞花・寒菊其他當季の草花を根締として挿し合さなければなりません。

福壽草（ふくじゆさう）

福壽草は、異名を元日草といひ、立ちかへる新玉の年のはじめより黄金色の蕾をふくらませて、松の内に一輪二輪或は三輪と咲き出で旭に匂ふは目出度い限りであります。

新年の花として珍重せられます。一種生け又は他物の根締に用ひます。すべて丈の低い小さなものでありますから多く卓下などに眞の花形として用ひます。また小さな花器に行の姿に生けることも可愛く、二重の下口などにも相應しいものであります。或は梅・若松などの置生けの根締或は掛・釣などの小さな花に、これを配したのも風情があつてよいものであります。正月花として又は總ての祝席に用ひられます。

柳（やなぎ）

柳は枝垂柳と川柳の二種に大別されますが、普通華道で柳と云へば枝垂柳を指します。枝垂柳は楊柳科に屬する落葉喬木で高さ數十尺に達します。總て水邊濕地を好んで生育しますが、其の枝條を賞して庭園などにも栽培されます葉は長卵形で邊緣に微鋸齒を有し、花には雌雄の別があり各々その姿を異にし、色は黄綠色であります。

枝垂柳は大垂、中垂、小垂の三通りに分けられますが、芽が早春から出初めますので、此の頃から三月節句迄を季節として用ひ、その以後は生けない事になつてゐます。又生花では主として行・草の花形に扱はれ、老樹の姿を見せるために幹或は枯木を使用することがあります。而して生花としてはすべて根締を用ふるのでありますが、木花では白玉椿が相應しく草花では寒菊・欵冬花・菜の花・杜若などが相應しいのであります。

川柳（かはやなぎ）

川柳は枝垂柳と同樣陸物でありますが、この方は殆ど灌木狀を呈して餘り大木になりません。此の一種に猫柳又は銀柳と稱へて銀色の花をつけて雅趣に富みますので、生花としてはこの花の時季でその皮の脱落しない時季即ち十二月頃から早春にかけて生けます。花の姿は眞・行・草何れにも生けられますが、二重や掛や釣などには不相應です。而してその生け方は枝條をよく捌いて交叉などのないやうに注意しなければなりません。根締は前記の枝垂柳同樣でよろしい。

草珊瑚（せんりやう）

草珊瑚（仙蓼）は、金栗蘭科の常綠灌木で、暖かい地方では山野の陰地や日蔭などに自生しますが、專ら觀賞用として庭園に栽培されます。通常叢生して高さ二三尺に達し葉は長卵形で鋸齒を有し對立します。夏の頃、その梢頭に黄綠色の小花を攢簇し、花後小果を結び十一月頃に至つて熟し、黄色又は紅色を呈しますが、綠葉の間からつぶらな珊瑚の如き實ののぞいて見られるのは見事なものです。生花ではこの實の熟する季節を賞して、實物ではありますが特別に一種生が許され、殊に陰性の木本であり乍ら、上花

として祝儀の席に生けるも差支ないとされて居る程であります。

欵冬花（ふきのとう）

欵冬花は、春の初めに蕗の宿根から生ずる花茎で、一種の苦味を賞して食用に供しますが、生花に用ひて雅趣あるものであります。花季は土地により早晩がありますが、大抵二三月頃で、普通二三寸から五六寸位であるが、中には尺以上に達するものもあります。

最初二三寸地上に表はれたものを初花とし、根引にすれば可成りの長さはありますが、然し一種生けにはなし難いので、多くは他物の根締に用ひます。また中花・晩花になれば一種生けもよく他物の根締に使つても無論よろしいのであります。

椿（つばき）

椿（又は山茶花）は山地に自生する陽性の常緑喬木で、花には一重咲・八重咲がありまして、白・赤・斑入・源平咲など色々の種類があります。

花季は十一月頃から開花を始めて翌春に及ぶものと、新春の頃から咲き始めるものと二通りで、前者を冬椿または寒椿といひ、後者を春椿と稱へてゐます。

冬椿は花季長く、從つて一時に開花する事なく少數の花を漸次に開いて行き、而も雪霜を凌ぐために枝頭の花は多く下向となり、葉をもつて之を蔽ふやうに咲きますが、春椿は花季が短かいために一時に花が咲き揃ひ、春陽を受けてすべて花が葉の上に現はれ出でますので、頗る賑々しく見られるものであります。

椿は里地又は山間の谷川附近などの低地を主として生育するのでありますが、樹は相當大木となり、濃厚な綠葉の間に、點々として純白色又は熱情的な眞紅の花を開き、其の態頗る美觀を呈するものであります。而して椿の自然は靜寂な姿を現じ、清冽な感じは到底他の物の及び得ない特色を有して居ります。されば古來南畫家はこの風韻を稱して多く題材として選び描いたものであります。

我が華道でもこれを賞して、一種生けとしまたは之に草物の根締を用ひ或は他物の根締としてよく使はれるのであります。殊に椿の一輪生けは七種傳花の一つとして選ばれ特別な取扱ひをなすことになつてゐるのであります。

二月の花

薊（あざみ）

薊は菊科に屬し、原野路傍に自生する宿根草本で、葉柄のない刺を有する葉が莖に着生して居ります。花は春から秋にかけて開き、その形牡丹刷毛に似てゐて、色は紫・紅が普通で白・黃などもあり、種類は多樣にありますが、その中でも最も丈高く莖堅く刺の强い鬼薊、これより稍ややさしい野薊・飛廉薊等が普通に知られてゐます。

薊はその莖葉に刺を有し觸るれば刺さんと身を守る峻嚴な姿は實に男性美の趣があり、この點を愛でゝ權威・獨立などの花言葉を偶し、薊格蘭では國華として尊んでゐる位でありまして、野草に屬するものではありますが、その野趣と雅致は格別で、生花として亦一入風情あるものであります。

薊は概して直出生のものでありますから、生花としては眞・行の姿に適し、莖數は三本乃至五七本用ふるを適當とし、すべて開花を高く莟を低く花形に應じて適當に用ひます。

彼岸櫻（ひがんざくら）

彼岸櫻は、春咲の櫻の中で最も早く、三月の彼岸前後に已に花を見せるもので、淡紅白色の單瓣花は葉に先つて枝一面に群り開き、頗る美觀を呈しますが、然し山櫻の如き美しさや風情などはありません。花の散り際は櫻共通の潔よいものであります。

この木は他の櫻と異り、細く纖弱な枝が可成り多く繁茂し、無數の花を着けますので、溫味ある軟かい感じを與へ

ることが特徴であり風情でありますから、生花に於ても、前後左右に十分小枝を使つてこの自然の風情を寫さなければなりません。而して一種生けを主として眞・行の置生となすことが最も相應しく老樹で適當な枝のある場合は、掛花生や釣花生に草の花形に生けることも差支へないのであります。

糸櫻（いとざくら）

糸櫻は、枝垂櫻又は枝垂彼岸などとも稱へ、高さ數丈に達し、枝條長く垂れて多くの花をつけますので頗る美しいもので花季は彼岸櫻より幾分遲いものであります。

花道では垂物として取扱ひ、行・草の姿に生けます。置生の時、根締に椿・波丁花・菜の花・金盞花・東菊・春菊などを配するとよく、廣口生の場合には大きい木を用ひて生けると相應しく、また石生として根締の女株に杜若を挿すなども風情があります。

紅梅（こうばい）

紅梅は梅の一種で紅色の花をつけるもので、その出生風情などは前述の白梅と同樣でありまして、生花に於ても普通の梅と同樣に扱へばよろしいのであります。

金雀花（えにしだ）

金雀花は蕚科に屬する常綠灌木で多く庭園などに觀賞用として栽培されてゐます。幹は自然に成長せしめると相當大きくなりますが決して大木とはならぬものであります枝條は細く垂れ下る性質を有して居りますが、殊に四五月頃黃金色の蝶形小花を無數につけていよ〳〵その特徴を發揮して梳れるが如くに垂れ靡く風情は實に見事なものであります。

生花ではこの自然に鑑みて通用物の垂物として取扱ひ、專ら花ある時季に一種を以て眞・行・草何れの花形にも生けますが、花の無い時でも他の草花を根締として生けられるのであります。

三月の花

海棠（かいどう）

海棠は、薔薇科の落葉灌木で高さ三四尺に達し、春四月頃發芽して葉と花とを生じます。花の色は淡紅または紅色で、特に花莖が長く下向きに咲き濃艶な風姿を見せますが幹は比較的雅致乏しく專ら花を稱します。

生花としては、眞・行・草何れの花形にも生けられますが、行の姿に一種生けとするが最も趣きよいものであります。或はその根締として、躑躅・瑞香花・金盞花・菜の花東菊・春菊などを挿合せても面白いものであります。

庭櫻（にはざくら）

庭櫻は他の櫻の如く餘り小枝も生ぜず大木にもなりませんが、根元から多く叢生して株をなし、當季枝條の見えない程花が密集して咲きます。生花としては眞・行・草何れにも生けられますが、主として眞・行の姿に、一種生けとするが最も相應しく、他の草花を根締に挿し添へても差支へはありません。

紫荆（すはう）

紫荆（蘇枋とも書く）は、蕚科に屬する落葉木本で、幹の高さ五六尺に達し根元から小幹を多く出して灌木狀を呈します。三月末から四月上旬頃葉に先だつて蛾形の紅紫色の小花を節々に簇生します。またこの木は節々が規則正しく曲をなし、各小枝の長さが大抵揃つてゐて、花はその下部から漸次咲き上るものであります。

生花としては眞・行・草何れの花形にも生け得られますが、就中紫荆の風情を最もよく表はすには、眞又は行の花態に一種生とするのがよろしい。或は他の草木の白又は黃色の花物を根締とするも亦差支へないのであります。

虎杖（いたどり）

虎杖は蓼科に屬する多年生草本で、よく山野に自生し、

高さ三四尺に達します。早春嫩芽を生じ、夏に至つて葉腋から三四寸位花軸を抽んでゝ小花を綴ります。當季他の草花を根締として、二重の上口或は下口などに生けて風情あるものであります。

梨花（なしのはな）

梨は薔薇科の落葉喬木で相當大木をなし、其の枝條は荒くて小枝が少なく、花季は四月頃で白色清秀な花を開き、その狀凄白で淋し味を感ぜしめるのであります。

生花としては、眞・行・草の何れの花形にも適しますが大抵は一種を行の姿に生けることが相應しいのであります然し梨は極めて曲多く木質が脆く折れ易いものでありますから、生花の材料としては、餘り撓めを施さずして姿の整ふやうなものを選ばなければなりません。

辛夷（こぶし）

辛夷は、木蓮科に屬する落葉喬木で、高さ六七尺から丈餘に達します。花は木蓮に似て小さく、葉に先だつて花を開きますが、枝が密生して多く花をつけるものもあります

生花としては眞・行・草何れにも生けられますが、行の姿最も相應しく大抵は一種生けといたします。然し躑躅・椿・金盞花・菜の花などを根締として挿合せるも面白い場合があります。これも梨と同樣、木質脆く折れ易いものでありますから、撓めることをしなくとも濟むやうな材料を選ぶことが肝要であります。

棣棠（やまぶき）

棣棠（又は山吹）は山野に自生する薔薇科の落葉灌木であります。一株から多數叢生し高さ四五尺に及び、四月頃新芽を出し黃金色の美花をつけますが、花には一重と八重とがあり、古歌に『七重八重花は咲けども山吹の實の一つだになきぞ悲しき』とある如く、八重は實を結びません。

華道では片垂物の通用物として扱はれます。隨つて二重の上に、横掛、向掛、釣生などの草の花形に限り主として

一重生けとして用ひられます。

仙臺萩（せんだいはぎ）

仙臺萩は多年生草本で普通の萩に似て垂れることなく、高さ二尺位に及び、三月より五月頃に亘つて黃色の蝶形花を開きます。これも生花では通用物として眞・行・草の花形に生けられますが、多くは他物の根締として用ひます。

瑞香（ずいこう）

瑞香花（又は沈丁花）は、瑞香花科の常綠灌木で高さ三四尺に及び、初冬の頃蕾を簇生し冬季より早春にかけて淡紅紫色（內面は白色）の小花を頭狀花序に綴りますが、香氣の頗る高いものであります。

生花では通用物として、主に行・草の姿に生けますが、花の風情を表はす上に於ては、一種生けが最もよく、他の草花を根締に用ひ、又はこれを木物の根締とすることも出來ます。

杏花（あんず）

杏花は薔薇科に屬する落葉果樹で、高さ一二丈にも達し樹幹も相當大きくなります。花は五瓣の帶紅白色で梅花よりは稍大きく、花季は梅に次で開きますが、花後食用に供せられる實を結びます。

生花としては、眞・行・草何れにも生けられますが、一種生けの行の姿が最も相應しいものです。またこれに適當な根締を配するも差支へありません。

惠比根（えびね）

惠比根は蘭科に屬する宿根草本で、節ある球形の根莖を具へその狀が海老の腹部に似てゐるを以てこの名があると云ひます。種類は多樣にあります。この植物は丈の低いものでありますから、生花として一種生は困難で、大抵は他物の根締として用ひられます。

藤（ふじ）

藤は蕚科に屬する纏繞性木本で山野に自生し、觀賞用として庭園にも栽培されます。莖は他の物に纏はつて數丈の高さに達します。葉は數箇の小葉を有する奇數羽狀複葉で、四五月頃葉腋から長さ數尺に及ぶ花房を垂れますが、花の色に紫・白・淡紅色などがありまして、莖は白藤は左卷で紫藤は右卷であります。

藤は蔓物であり垂れ下がる性質をもつてゐますから、生花では必ず草の花形とし、掛・釣・船・二重上口などに生けますが、場合によつては赤松などに絡ませて置生にすることもあります。また藤は木物ではあるが、莖が至つて弱いので華道では竹・牡丹と共に三通用物の一つとして扱はれます。

牡丹（ぼたん）

牡丹は毛茛科に屬する落葉灌木で原産は支那であります唐土では「花王」と稱へ恰も我國に於ける櫻の如く愛賞して居ります。樹の高さは六七尺に至り早春の頃枝頭に紅芽を發しそれより葉を生じ五月頃花を開きますが、色に淡紅・濃紅・雪白・粉白・斑入など色々あり、また大輪・小輪・一重・八重・千重・萬重などがあります。

生花では、牡丹は灌木で柔しいので草木通用物として扱ひますが、其の氣品と美しさを賞し、七種傳花の一つとして特別に取扱ひます。即ちその花の德を尊び他の草木を絶對に挿し合さず、必ず一種生とし、又品位と風情とを表はす上に於て、如何なる場合と雖も置生に限るとされて居ります。

櫻（さくら）

櫻は三月の末より四月の末迄に互つて咲き續ける、我國の代表的名花でありまして、薔薇科に屬する木本であります。花は五瓣淡紅色で、原種は山櫻でありますが、種類頗る多く殆ど三百種にも達するといふことであります。然し華道では、その取扱上から山櫻・本櫻・彼岸櫻・寒櫻の四通位に大別して扱はれて居ります。その中山櫻と本櫻の類は五種傳花の一つとして取扱ひ、その他のものは何れも普通の花同樣の取扱方をいたします。而して彼岸櫻及び枝垂櫻に就ては既に前項に於て述べましたから、爰には山櫻と本櫻に就て述べることゝいたします。

◎山櫻　山櫻は薄物と稱へ、淡紅白色の單瓣小花をつけるのでありますが、その繚亂と咲き出る風情は他の何物も及ばない美しさであります。

◎本櫻　本櫻は厚物と稱へる種類のもので、牡丹櫻とも稱へ、稍濃い淡紅白色の花をつけその種類に八重咲千重咲などがあります。この花は山櫻の端麗さに比して幾分重苦しい感じはあるが亦格別の美しさをもつて居ります。

櫻を生花に生けるには、概して滿開に近いものを賑々しく艶やかに生けることがよく傳花としては、中段の花の間に松を配して生けることになつて居ります。これは吉野とか嵐山とか云つた櫻の名所の景を一本の櫻の生花に象徴するのであります。

李花（すもゝ）

李花は薔薇科の落葉木本で、相當大木をなし、四月頃白色の小花を簇生し、後實を結びますが、實は食用に供されます。

生花としては眞・行・草何れにも生けられますが、就中行の姿が最も相應しいのであります。主として一種生としますが、赤椿・躑躅・菜の花・金盞花などを根締とすることも亦雅味あるものであります。而してこの木は質脆く折れ易いものでありますから、最初に適當な材料を見立てゝ用ひなければなりません。

木蓮（もくれん）

木蓮は木蓮科に屬する落葉喬木でありまして、玉蘭と紫木蓮の別があり、玉蘭は大樹になり四月頃葉に先だつて白色大形の花を開きますが、紫木蓮は餘り大木にならず小幹を簇生して四月の終り頃新葉と共に紫色の花を着けます

生花としては、眞・行・草何れの姿に生けるも差支ありませんが、概して若枝は眞に、老樹は草に、其の他は行の花形に生け分けるが相應しいのであります。主として一種生けに適しますが、躑躅・赤椿・菜の花・金盞花などを根締として挿し合せるも差支ありません。

東菊（あづまぎく）

東菊は菊科に属する草本で、四五月頃紅紫色の花を開きます。生花としては一種生けとして眞・行・草の姿に生けられ、また他物の根締にするに適します。

紫羅欄（あらせいとう）

紫羅欄は一年生又は二年生の草本で種類多く、花は五六月頃に開き、普通紫色で太く總狀花をなしてゐる。花後細長くして扁平又は圓筒形の實を結びます。幹は高さ二三尺に達し下部は灌木狀をなして居ります。すべて形が小さいので、生花としては主として他物の根締に用ひられます。

桃（もも）

桃は薔薇科の落葉亞喬木で、到る處に栽培せられ觀賞採果に供せられてゐますが、幹は高さ丈餘に達し、四月頃葉に先だつて花を開き後實を結びます。花の色には白・紅・淡紅、紅白、交り等あり、單瓣・重瓣あり、又大輪・小輪などの別があります。

桃はすべて枝の岐れ口より枝先迄圓味をもち、極めて優美に女性的で、花は根元から枝先へと漸次咲き上るのが、その特徴でありますから、生花としてはこの風情をよく寫さなければなりません、眞・行・草何れの花形にも生けられますが、何れの場合も枝の交叉なきやう素直に立ち上らせ、岐れ口より上まで圓味をもたせて、どこまでも女性的に優しく生け表はし、なほ陽方の枝や下段に開花を多く見せ、上段を當勝ちとすることが肝要であります。

春菊（しゅんぎく）

春菊は菊科に属する一年生草本で、葉は羽狀に深く裂け

莖の高さ一尺餘に達し、春日黄色又は白色の花を開きます。莖が至つて柔かく且つ丈の低いものでありますから、主として他物の根締として用ひます。

百合（ゆり）

百合は百合科の多年生草本で、山野に自生し、地下の鱗莖から抽んでゝ美花をつけるのであります。種類に百合中一番丈夫で丈も高く、節々に花をつける卷丹、莖の至つて丈夫で大きな花數輪をつける鐵砲百合、丈三尺位に達し莖頭枝をなして八九輪の花をつけるたけしま百合、幹細く柔かで葉の笹に似たる笹百合、幹の高さ一尺四五寸位にのび花二三輪上向に開く透百合、或は最も優しく丈も一尺内外にて花二三輪をつける姫百合などがありますが、生花としては普通一種生けとすることが相應しいのでありますが、笹百合、透百合、姫百合などは他物の根締としてもよいものであります。

馬醉木（あせぼ）

馬醉木は石南花科の常綠灌木で、山野に自生して大抵三四尺から五六尺に達し、春日枝頭に小さい白花を綴つて咲きます。

生花としては行・草の花形に生けて相應しく、他物の根締としても用ひます。毒木ですから祝儀の席には生けられません。

馬蘭（ばりん）

馬蘭は蕦尾科に属する一種の觀賞用多年生草本で、支那及び朝鮮に多く產します。その姿があやめに似てゐますので花あやめ又はねぢあやめとも稱へます。生花としては葉を組みかへずに其儘、一株づゝで眞副體の姿を造るのであります。

槑櫨（くわりん）

槑櫨は薔薇科に属する落葉喬木で、高さ二三丈にも及び春の末淡紅色の花を開き秋に實が熟します。生花としては眞・行・草何れの花形にも生けられ、主として一種生とい

たしますが、根締に他の草木を用ひてもよろしい。

鳶尾（いちはつ）

鳶尾は、鳶尾科の多年生草本で、山野に自生するものでありますが、庭園にも植ゑて觀賞いたします。葉は扁平で、四五月頃白色または紫色の可憐な花を開きます。

生花としては大抵行の花形に置生としますが、大體杜若同様に扱ひ、すべて葉より花を高く用ひます。

荷包牡丹（けまんさう）

荷包牡丹は、罌粟科の多年生草本で、春三月頃芽を生じ高さ七八寸乃至二尺位に及び、葉は牡丹に似て薄く柔かであります。四五月の頃葉腋から花軸を出して總狀花序に花を綴つて下垂いたしますが、淡紅色の頗る美しい花で、俗に藤牡丹と稱へます。至つて小さいものでありますから、生花としては横掛、向掛などに、草の花形として用ひられます。

林檎（りんご）

林檎は薔薇科に屬する落葉喬木でありまして、高さ二丈にも達し、五月頃白花又は淡紅色の五瓣花を開き、實は秋の頃熟して食用に供せられます。

生花としては、眞・行・草何れの花形にも生けられます

岩躑躅（いはつゝじ）

岩躑躅は石南花科の小灌木で、丈僅かに四五寸にしか達しませんが、葉の附着せる下部から花穗を抽き二三花を着けますが、至つて矮小のものでありますから、多く他物の根締に用ひ、又二重の上口や掛花生等にも用ひられます。

石巖（きりしま）

石巖は躑躅の一種で、石南花科に屬する灌木でありますが、高さは數尺に達し根元から多くの枝を分つて相當繁茂し、春早く紅色の小花を開きます。生花としては主として一種生にいたしますが、また之に草花の根締を挿し添へ或は松などの根締として使用されます。

麻葉繡毬（こでまり）

小手毬は薔薇科の落葉小灌木で、原産は支那でありますが、幹は至つて細く高さ四五尺に達し小枝を生じて、春日新葉と共に白色の小花を繖形狀に排列し毬の如くに密集いたします。そして此の頃になると花の重みで枝條が著しく下垂いたします。

從つて華道では、この花を垂物として、總て掛や釣又は二重の上などに、草の姿に生けることになつて居ります。

燕子花（かきつばた）

燕子花は鳶尾科に屬する多年生水草で池沼に生じますが觀賞用として廣く栽培されます。種類に一季咲と四季咲の別がありまして、何れも早春先づ水切葉を生じ次いで完全な葉を出すものであります。而して葉の叢生した中央から花莖を抽んで、その節々からは小さな葉を生じ、莖頭につく花も、初めの頃は葉を冠つてゐます。

花の色は紫碧色を原色としますが、其の他變化したものに白色・紅色・翠碧色・斑入などがあります。

葉は左右交互に順序正しく發育し、中央には絶へず幼芽を發生し、また各葉の莖部は俗に懐と稱へられて切れ込んだやうになつてゐて、多くの葉は何れもこの懐で抱き合つてゐます。尚その葉先は爪と名付けられて、すべて内部に向つて曲りを生じてゐて、必ず懐のある方に曲つてゐるからいつも懐と懐、爪と爪とは向合ひになつてゐるのであります。

燕子花は四季咲の花でありまして、春から冬へかけて年中花が咲くのでありますが、同じく花が咲くにしましても、春夏秋冬季節の異るに從つて、それ〴〵花の趣が違ひますので、生方にも自ら四季の別があります。委しく云へば十二ケ月みなそれ〴〵の生方があるのであります。

即ち、春の燕子花は葉が柔らかでありますから、葉を組

みかへずに其儘使ふやうにし花は莖が短いものでありますから、其の出生によつて葉より低く挿すのであります。夏は葉も次第に成長し、花も勢よく咲盛るものでありますから、其心で葉の組合せも緩やかにし、春出の葉の十分成長した意で葉の先を垂らしたり、花も春よりは少しく高く夏も末になれば、葉よりも花を高く挿すのであります。

それから段々秋になれば、花莖も一層高くし、幾らか強はばりたる勢ひを見せるのであります。又冬季になれば、雪霜にいぢけて花莖も伸び兼ねて自然と短かくなり葉も次第に末枯れになつて來るから、生花にも其姿を取り、花を極めて低くさす等、四季に應じて其折々の姿に生けなければなりません。

花形は眞・行・草何れにも生け得られ、置生・掛・釣・二重・船等悉くに用ひられ、一種生を主としますが、他物の根締としても使はれ、また魚道生・石生・重ね生等の變化ある取扱ひも出來るのであります。

山躑躅（やまつゝじ）

躑躅は石南花科に屬する灌木で、その種類頗る多く、山躑躅も其の一つで丈高くなり四方に枝を出して擴がり、段段をなし、生育いたしますので、之を生ける上に於ても段と段との間にある小枝を除いて、段々を明瞭に見せるやうにしなければなりません。而してつゝじは如何なる席に生けるも差支へありませんが、花の色合には注意を要します

連翹（れんげう）

連翹は木犀科の落葉灌木で、高さ七八尺に達し、枝の上部は稍や垂れるものであります。早春葉に先だつて黃色の花を綴ります。華道では通用物の垂れ物として扱はれますので、出生上から眞の姿には適せず、行・草に生けますが就中草の姿が最も相應しいのであります。大抵一種生けにいたしますが、何れの姿に生ける時も必ず垂枝を見せなければなりません。祝儀の席の外は何時生けても差支へありません。

木瓜（ぼけ）

木瓜は、其姿海棠に似たる薔薇科の落葉灌木で、山野に自生し高さ三四尺に及び、春日淡紅色又は白色・紅色・斑入などの可憐な花を開きます。生花としては眞・行・草何れの花形に生けるも差支へありませんが、行・草の姿が最も相應しいのであります。一種生とし又は他の草花を根締としても生けられます。

菜の花（なのはな）

菜種は一年生草本で、多く初秋に播種され、早春二月頃根葉の中から莖を抽んで、三四月頃黃色の十字花を無數につけ、花後莢を生じ中に實を宿しますが、その實を絞つて油をとるのであります。生花としては花の頃使ふのでありまして、一種生け差支へなく、又柳、彼岸櫻、木蓮、つゝじ、檜柏、槇等の根締としてもよく用ひられます。

金盞花（きんせんくわ）

金盞花は菊科の草本で、秋に種を蒔けば翌春に、春に種を蒔けば秋に開花を見るものであります。併し普通は冬十一月頃から春四月頃に及んで花を開き、花の色は大抵紅黃色又は淡黃色でありますが、其の他にも色々あります。生花としては主として他物の根締として用ひられますが、一種生けとしても差支へありません。

四月の花

萬壽草（ほうちやくさう）

萬壽草は高さ三四尺に達する宿根草で、三四月頃發芽し五月末頃釣鐘草の花に似た紫白色又は純白色の花を開きます。生花としては眞・行・草に通じて生けられ、中でも行の姿が最も適するのであります。他の草花を根締として挿合せるも差支へありませんが、大體一種生けがよろしいのであります。

石南花（しやくなんげ）

石南花は石南花科の常緑又は落葉灌木で、高さ四五尺乃至間餘に達し、初夏の頃、淡紅色の美麗な花を枝先に簇生いたします。生花としては眞・行・草の花形に通じ生けられますが、多くは行・草に適し、一種生けを最も佳といたします。又躑躅其の他の草花を之が根締として挿合せても差支へありません。

罌粟花（けしのはな）

罌粟は罌粟科に屬する一年生又は越年生草本で、初夏の頃、單瓣、重瓣、白、赤其他種々の豐大な美花を開きます大體直出生のものでありますから、生花としては眞の姿が最も相應しく、二本乃至三本位を生けるのがよろしい。床花としては好ましくありませんが、連花の節は差支へありません。尙この罌粟の一種に單瓣にしてすべて小形の美人草と稱へるものがありますが、取扱方など罌粟と同樣であります。

溲疏（うのはな）

溲疏（又は卯の花）は、虎耳草科に屬する落葉灌木で、山籠溪邊などに自生し、又庭園籬などにも栽植されます。高さ六七尺から一丈四五尺にも及ぶものもありまして、四五月頃恰も時ならぬ雪のやうな純白の美花を穗狀に綴ります華道では通用物の垂物として取扱ひ、すべて草の花形に二重の上口や掛又は釣などに主として一種生とされるのであります。

橘花（たちばな）

橘花は芸香科の常緑木本で、莖は高さ十尺位に達し四月頃白色の小花を開き、花葉からは香氣を發します。主として立華に用ひられ、生花には餘り生けられませんが、生けても差支へはありません。

鶯織柳（れだま）

鶯織柳は金雀花に屬する一種で、其の高さは間餘に達します。枝條は大體金雀花に似てゐますが、主幹の節々から肉を有する小枝を無數に簇生し、五月頃黃色の豆狀花を開きますが、金雀花の如く全體が垂れるものでなく僅かに下枝が垂れる位であります。生花としては行・草に生けられますが、中でも行の姿が最も相應しく、一種生けもよろしく、又夏小菊や繡線菊などの草花を配することも面白いものであります。

岩藤（いはふじ）

岩藤は山野に自生する藤の一種で高さ二尺位に達し、赤紫色の花を開きますが、普通の藤のやうに蔓狀を呈する迄には至りません。至つて小さいものでありますから、普通の掛や釣などに用ひられる程度であります。

葵（あふひ）

葵は葵科に屬する草本で觀賞用として栽培されます。種類に數種ありますが、普通最も多く見受けられるものは立葵と稱へるもので、眞直ぐに出生し高さ間餘に達するものであつて、四五月頃節々に紅色或は白色の花を開きます生花としては眞・行の花形に生けて差支へありませんが、眞の姿が最も相應しいのであります。

六月雪（はくてふげ）

六月雪は茜草科の常緑小灌木で、高さ四五尺に及び、枝は細くしなやかに垂れ靡き、それに白色の小花を無數に着けるのであります。生花としては行・草の花形に適し、二重の上口や掛生・釣生けとしてよくその自然を表はすことが出來ます。

繡線菊（しもつけ）

繡線菊は山地に自生する落葉小灌木で、茶褐色の莖は高さ三尺位に達し、小枝を簇生して莖頭に淡紅色又は白色の小花を房狀に着けるものであります。生花としては眞・行

草何れの姿にも生けられますが、最も行の姿が相應しく、又一種生けがよろしいのですが、これに白色の草花を根締として挿合せるも面白く、或は他の木物の根締としても差支へありません。

##芍藥（しやくやく）

芍藥は毛茛科に屬する多年生草本で、古くから庭園に栽培して花を觀賞されます。春の頃高さ二三尺の莖を生じ枝を分ちて初夏の頃枝頭に二花乃至五花を開きますが、その花には單瓣・重瓣あり、又色に紅・白・淡紅・深紅等種種の變化があり、大形にして頗る艶美なものであります。生花としてはすべて一種生けとし、花形は眞又は行の姿に生けられますが、成るべく瘦せないやうに福やかに生けなければなりません。尙花數を奇數とし、葉を巧みに使つてシナヤカに整へて風情を表はすことが肝要です。芍藥は祝儀のものではありますが、極く改まつた席には用ひられません。

紫陽花（あぢさゐ）

紫陽花は虎耳草科の落葉灌木で、觀賞用として栽培されます。莖の高さ四五尺に叢生し淡紫碧色の多數の美花を聚散花序に開きますが、その色が種々變化するところから七變化などの異名もあります。生花としては通用物の一種として取扱ひ、多く一種生けといたしますが、成るべく豐艶に生けることが宜しい。併しこの花は陰性ですから、客席には好ましからず、又色の變るところから祝席には嫌はれ、殊に婚禮の席には絶對に生けてはなりません。

風車（かざぐるま）

風車は蔓性の落葉灌木で庭園にもよく栽培されます。葉は對生三出し、その葉柄が長く、之によつて他物に卷絡して成長いたします。花は、徑三寸許りの紫色又は白色のものであります。花道では蔓物の通用物として取扱ひ、すべて草の花形に、二重の上口・掛・釣花生等に專ら生けられます。

紫蘭（しらん）

紫蘭は蘭科の多年生草本で、山中溪澗等によく自生いたしますが、又庭園に栽培して觀賞されます。葉は一尺ばかりの披針形で縱に多く條がありその基部は筒狀をなして花莖を抱擁して居ります。初夏の頃花形の上部に紅紫色の可憐な花を開きます。直ぐ出生のものでありますから。生花としては主として眞の姿に生けられます。

繡毬花（おほでまり）

繡毬花は落葉灌木で、『てまりばな』など稱へ庭園に栽培されて觀賞されます。その高さは間餘に達し、初夏黃白色の紫陽花に似た球狀の花を多數攢簇して開きます。生花としては一種生けもよく又他の草花を根締として挿し合せても風情があります。主として行又は草の花形に生けられるのであります。

うつぼ草

うつぼ草は唇形科の多年生草本で四時花を有するものでありますが、冬は地に着きて叢生し、春日莖を抽んで高さ二三寸乃至一尺位に達し、その莖頭に穗狀をなして數花を開きますが、花の色は淡紫色、深紅色、白などいろ〳〵あります。而して小さいものでありますから、生花に於ては主として他物の根締として用ひられます。

錦帶花（はこねうつぎ）

錦帶花は忍冬科の落葉灌木で庭園に栽培して觀賞されます、莖は中空にして高さ七八尺に達し、四月末頃聚散花序に小花を攢簇します。而して初めは白色でありますが、次第に淡紅色となり、遂には紅色に變じ、頗る美觀を呈します。生花としては、通用物の垂物として扱はれ、花形は行草が相應しく、一種生けも差支へありませんが、他の草花を根締として挿し合せるがよろしい。

接骨木（にはとこ）

接骨木は落葉灌木でありますが、その高さ丈餘に達するものもあります。毎春二月頃發芽を始め三四月頃に至り淺黄色の小花を簇生します。生花としては眞・行・草何れにも生けられますが、花は美しくありませんから一種生けよりも季節の草花を根締として生け合せるが宜しい。

五月の花

石竹（せきちく）

石竹は庭園などに栽培される宿根草本で、莖の高さ一尺餘に及び、叢生して五六月頃紅色又は白色・淡紅色などの花を開きます。至つて小さいものでありますから生花としては大抵他物の根締として用ひられます。

萱草（かんざう）

萱草は百合科の宿根草本で、山野路傍等に自生し、その丈一尺乃至二尺位に達し、蘭に似た葉を多數叢生します。この頃花莖を抽き紫斑點ある橙黄色の百合に似た可憐な花を開きます。生花としては主として行の花形に一種生けとして用ひられます。

玉蟬花（はなしようぶ）

花菖蒲は鳶尾科の多年生草本で、水邊濕地を好んで生育し高さ二三尺に達し、初夏の頃溪蓀に似た花を開きます。生花に於ては、水陸通用物として取扱ひ、直出生のものでありますから、主として一種を眞・行の花形に生けます總じて花を高く葉を低く、而も開花高く蕾を低く使ふことが自然に叶ふわけであります。

長春（ちようしゆん）

長春は薔薇科の常綠灌木で通常淡紅色の五瓣花を開きます。生花では通用物として取扱ひ、他物の根締として多く使はれます。

剪夏羅（がんび）

剪夏羅は石竹科の多年生草本で山地に多く自生し、庭園にも培養して觀賞されます。莖は直立して一二尺の高さに及び、六七月頃莖頭に紅黄色の美花を開きます。至つて閑寂な淡味を有し、頗る情緒ある花であります。生花としては一種生けも宜しいが、又他物の根締としてよく用ひられます。花形は直出生のものですから眞・行の姿が相應しいのであります。

牽牛花（あさがほ）

牽牛花は旋花科の一年生草本で、莖は纏繞性の蔓物であります。その原色は白と赤でありましたのが、現今では園藝變種が相當に多く從つて花色にも隨分變つたものが澤山あります。この花は、夏の曉早く咲き出でてまた露のひぬ間に凋む程、その一つ〳〵は短命でありますが、青葉涼しく風薰る頃から咲きはじめて、金風碧梧を吹く中秋の節まで、咲きかはり咲きかはり咲き續けるものであります。生花としては蔓物の垂れ物として取扱ひます。ですからすべて置生にせず、掛花生や釣花生又は二重の上口などに草の花形に生けるのであります。

溪蓀（あやめ）

溪蓀は鳶尾科の多年生草本で水邊又は平地に生育いたしますが、觀賞用として園圃に多く栽培されます。花葉の姿は燕子花や菖蒲などに似て居ますが、花は至つて小さく葉幅も狹く、すべての點に優しいものであります。生花としては、大抵行の姿に、花は三五輪乃至七輪位を程度として花を高く葉は低く、開花を高く蕾は低くして、すべて一種生けとし葉は組み替へずに自然の儘を使ふのであります。

藤撫子（ふじなでしこ）

藤撫子は一年生の草本でありまして、彼岸頃種子を蒔きますと五六月頃尺餘に長じて白色又は淡紅色の小花を簇生

いたします。生花としては、丈の低いものでありますから大抵他物の根締として用ひられます。

午時花（とけいさう）

午時花は西蕃蓮花の攀緣性常綠草本で、莖細く葉腋から卷鬚を生じ、葉は八ツ手の如くその先が五つに岐れてをり花は時計の形に似た白色花であります。生花としては主として向ふ掛・横掛などに草の姿に生けられます。

金糸桃（びやうやなぎ）

金糸桃は金糸桃科の小灌木で高さ三四尺に達し、夏日枝頭に黃色の小花を開きますが、その枝の先端は垂れ下る性質を持つて居ります。生花としては、垂れ物として掛・釣二重の上口などに草の姿に生けることになつて居ります。

梔子花（くちなし）

梔子花は茜草科の常綠灌木で、山野に自生し高さ丈餘に及ぶものもあります。晩春から初夏にかけて芳香を有する白色の花を開きます。花後黃色の實を結びますが、これは染料に用ひられます。生花としては眞・行・草何れの花形にも生けられますが、實のある時分は用ひません。

柘榴（ざくろ）

柘榴は柘榴科の落葉灌木で高さ丈餘に達し、古木は幹が撚れて大變面白い曲をなすものであります。六七月の頃紅色又は白色の單瓣或は重瓣の花を開きます。生花としては花の時も實の時もこれを賞して用ひますが、多く行・草の花形に生けられます。

萍蓬草（かはほね）

萍蓬草（又は河骨）は、睡蓮科の多年生草本で、池沼に自生し、三月頃より發芽して六七月頃黃色の花を開きます。生花としては、これのみ一種生けともしますが、太藺、蒲葦などの水草の根締とし、又は魚道生けなどとして相應しいものであります。

檉柳（ぎよりゆう）

檉柳は檉柳科の灌木で六月頃白色又は淡紅色の小花を總狀花序に枝の頂端に攢簇して咲きます。木本ではありますが枝先や葉が垂れ下りますので、生花では垂れ物として取扱ひ行又は草の姿に生けられます。

六月の花

蓮華（はす）

蓮は睡蓮科に屬する有名な宿根水草で、年々地下莖から新根を伸し、其の節々から葉や莖を生じて水面高く抽出するものでありますが、初め幼芽は堅く卷いて居り水面を離るゝにつれて漸次開くものであります。ですからその開き程度によつて、卷葉、撞木葉、開葉などと稱へ、生花ではこれを浮葉、卷葉、撞木葉、開葉、朽葉等に區別して取扱ひます。花は白色又は紅色の大輪で莖頭に必ず一花を着ける事になつて居りますが、早朝に開花し、午後に至つて一たん閉ぢ、翌朝再び開花し、之を三回繰返して三日目の午後散り果を殘すのであります。生花の方ではこれを蓮肉といつて使用することになつてをります。傳花として普通の生花とは大分趣を異にした取扱ひをされる事になつて居ります。泥中に生じて而も清淨な花として、殊に佛緣深い所から佛事に因んだ席によく生けられます。

銀寶珠（ぎぼうしゆ）

銀寶珠は百合科の多年生草本で山野に自生するものでありますが、觀賞用としてもよく庭園に栽培されます。種類には唐銀寶珠、玉簪などありますが、何れも高さ二尺位に達し、葉は卵形全邊で長柄を具へ叢生し、別に花軸を抽いて帶紫色の花を開きます。これは、花よりも葉を賞するものでありますから、生花では葉物として扱ひます。姿は置生けに限り必ず一種生けといたします。尙、唐銀寶珠玉簪など、姿容に多少の相違はありますが、何れも前記の銀寶珠同樣に取扱ひます。

蒲（がま）

蒲（又は香蒲）は香蒲科の多年生水草で池沼に自生いたします。春の頃根茎から發芽し高さ間餘に及び、萱の如き葉は頗る長く而も垂れるもので花は褐色の雌雄兩花穗密接して蠟燭の形を呈します。生花では水草の垂物として取扱ひますが、これのみ一種生けとする事なく、必ず根締に、杜若、河骨、澤瀉などを生け合せることになつて居ります。

葦（あし）

葦は禾本科の多年生水草で池沼又は海邊などに自生いたしますが、所によつて其の名を異にし、葭、濱荻、難波草等稱へられます。毎春四月頃發芽し漸次暖氣に伴れて成長し、高さ數尺に及んで多くの線狀披針形の葉をつけます。而して八月頃に至り莖頂に穗をなして花を開くものであります。生花としては水草の垂れ物として扱ひ、新芽の出る四月頃から冬枯れの姿を示す十月頃迄用ひられます。

取扱ひは殆ど前述の蒲と同樣であります。

鐵線（てつせん）

鐵線は毛茛科の多年生攀緣草本で莖の節々から生じる蔓によつて他の物に卷絡して伸び、七月頃淡紫色の大きな花を開くものであります。生花では蔓物の通用物として取扱ひ、二重の上口、掛、釣などに草の姿に限り生けるのであります。

撫子（なでしこ）

撫子は石竹科の宿根草本で山野に自生し、高さ二尺位に達し、八九月頃淡紅色の美花を開きますが、秋の七草の一つとして算へられ清楚可憐な風情を有するものであります生花では多く他物の根締として用ひられますが、行の姿に一種生けとしたものは秋の情緒豐かなものであります。

虎の尾（とらのを）

虎の尾には、おか虎の尾とるり虎の尾とがあり、おか虎の尾は櫻草科に屬し、水沼地に自生しますが、るり虎の尾は玄參科に屬し多く林野に自生いたします。而しておか虎の尾は三四尺に達し、白色の穗狀の小花を密攢し、るり虎の尾は高さ二三尺になり淡紫碧色のこれも穗狀の花を着けます。生花としては眞・行・草何れの姿にも生けられます

射干（ひあふぎ）

射干は鳶尾科の宿根草本で山野に自生しますが觀賞用として庭園にもよく培養されます。種類にチヤボ射干、孔雀射干、鳳凰射干、達磨射干などがあり、丈や姿に幾分の相違はありますが、何れも葉は劍狀のものが密生して扁平となり、恰も檜扇を開いたやうで、夏日葉の間から一莖を抽きその莖頭に紅色又は黃褐色の花を開きます。生花では主として行の花形に一種生けとし、又は他の草花を根締に挿し合せて用ひます。

晝顔（ひるがほ）

晝顔は旋花科の纏繞性多年生草本で、原野路傍などに自生しますが、すべてが朝顔に似てそれよりも弱々しく、又朝顔の花の朝早く開くに對し、これは日中に開くものであります。生花に於ても朝顔同樣に、蔓物として扱ひ、二重の上、掛、釣などに草の姿に生けるのであります。

夕顔（ゆふがほ）

夕顔は朝顔と同種のものでありますが、朝顔よりも花葉共に大きく夕方白花を開くものであります。矢張り蔓物でありまして、生花に於てはすべて朝顔に準じて扱ひます。

莞（ふとゐ）

莞（又は太藺）は莎草科の多年生草本で、池沼に自生し觀賞用として庭池にも培養されます。高さ間餘に達し、五六月頃莖頭に茶褐色の多數の小花が穗狀に開きます。その青々とした莖は直幹でありますが、初秋の頃になると莖が靡き氣味に垂れますので、生花では水草の垂れ物として扱

ひます。又花はあつても餘り美しくないので、杜若や海芋の如き美しい花をつける當季の水草を根締に配して姿を整へるのであります。

胡蝶花（しやが）

胡蝶花（又は著莪）は鳶尾科に屬する多年生常綠草本で、山陰溪谷等の陰地を好んで自生し多く叢の中に育つので叢菖蒲とも稱へられます。早春地下莖から芽を出し高さ一二尺に達し、五六月頃莖を抽いて、白色に紫の斑點ある美しい花を開きます。其の形が恰も胡蝶の如くでありますからこの名があるのでありませう。生花では主として行の花形に取扱ひ、大抵一種生けとして用ひられます。

海芋（かいう）

海芋は天南星科の多年生草本で、池沼や濕地に成育し、毎年四月中旬頃より新芽を發し、葉は一寸里芋の葉に似て二尺位に達し、五六月頃に至り高く花莖を抽いてラッパ形の黃白色の花を開きます。これをオランダカイウと稱し、又葉に白色の斑點ある小形のものをゴールデンカラーといひます。生花ではこの一種を置生けとし、或は魚道生などに用ひます。

辨慶草（べんけいさう）

辨慶草は辨慶草科に屬する多年生草本で多くは園養されます。四月頃發芽し、高さ二三尺に達し、六月の末頃から莖頭に枝をなして白色の小花を簇生いたします。生花としては行又は草の姿に最も相應しく、一種生けとし又は根締に他の草花を生け合せて用ひます。

大山蓮（たいさんぼく）

大山蓮は木蘭科に屬する常綠喬木で、觀賞用として庭園などに栽培されます。木は相當高くなり、葉は長楕圓形にして表面は椿の如く平滑で光澤を有し、裏面は茶褐色を呈してゐます。五六月頃花徑六七寸位の頗る香氣の強い白色大輪の花を開きます。生花では眞・行・草何れの花形にも生けられますが、大輪であり大葉でありますから、花や葉の働きには十分の注意をしなければなりません。

日々草（にちにちさう）

日々草は夾竹草科に屬する一年生草本で、四月頃新芽を出し、葉は對生して莖は二尺位の高さに達し、六月頃から紅紫色又は白色の可憐な花を開きます。生花としては眞・行・草の姿に主として一種生けとし、又は他物の根締として適當な材料であります。

七月の花

柏（かしは）

柏は山地に自生する落葉喬木でありますが、庭樹としても栽培されます。葉は濶大なる倒卵形で相當大きく長さ四五寸に達するものもあります。四五月頃葉と共に花をつけますが、花は黃褐色の總狀花で大して美しくありません。それで生花では花なき種類に算へて、必ず當季の花物を之が根締として生ける事に定められてあります。

白花敗醬（をとこへし）

白花敗醬（又は男郎花）は、敗醬科の多年生草本で、山野に自生し、莖は直立して三四尺に達し、七八月頃莖頭に小枝を分つて白色の小花を繖房狀に綴ります。すべて女郎花に似てゐますが、女郎花の黃色花に對しこれは白色花であります。生花では一種生けとして用ひます。

桔梗（ききよう）

桔梗は桔梗科に屬する多年生草本で、山野に自生し、莖は直立して二三尺に達し、葉は無柄にして卵狀披針形で、七月頃莖又は枝の頂きに大形の花を一花乃至二三花を攢簇しますが、その色は藍紫色の所謂桔梗色で、秋の野を飾る秋草の中でも最も清楚で且つ艶麗なものであります。生花としては眞・行・草何れにも生けられますが、一種生けに

最も風情があり、又仙翁、撫子、日々草などを之が根締として挿し合せるもよく、或は芒、女郎花などの根締とするか、之等と交生にするも面白いものであります。

萩（はぎ）

萩は荳科の多年生の灌木で、山野によく自生いたしますが、又庭園に栽培して其の風情が觀賞されます。陽春四月頃新芽を出し、多く叢生繁茂して年を經れば可なり大きくなり、高さ五六尺にも達し、初秋の頃白色又は紅紫色の可憐な花を開きます。秋の七草の一つとして其の優しい風情が賞されますが、生花では草木通用物と見、垂れ物として取扱ひます。從つて二重の上口、掛、釣生などに懸崖に草の姿に生けるのであります。

木槿（もくげ）

槿木は葵科に屬する落葉灌木で、觀賞用として庭園に培養せられ又は籬に栽植せられます。幹の高さ丈餘に達し、毎春四月頃新芽を出し、六七月頃より秋にかけて白色・淡紅色或は淡紫色などの單瓣又は重瓣の花を咲きます。生花では、七八月頃を季節として、主として行の花形に一種生けとし、又は他の木物の根締としても用ひられます。

敗醤（をみなへし）

敗醤（又は女郎花）は、敗醤科の多年生草本で、莖の高さ普通三四尺に達し、多くの小枝を岐つて初秋の頃枝頭に黄色の小花を複聚散花序に綴るのであります。秋の七草の一つに算へられ、娘部子・美人部子とも書かれます。生花としては一種生が最も相應しいのでありますが、又桔梗・河原撫子・よめ菜菊などを根締に用ひ、或は芒・刈萱・桔梗などと交生にしてもよろしいものであります。

澤水木（さはみづき）

澤水木は、山野に自生する落葉灌木で、高さは相當大きくなり、夏の初め帶白色の小花數箇づつを簇生し、後實を結び八月頃紅熟して美觀を呈します。一寸梅嫌に似て居ますが、それよりは枝が荒々しく實も大きいのであります。生花では實物として七八月頃の實のある頃に生けます。而して眞・行・草何れの花形にも適しますが、必ず花ある草木を根締として用ひなければなりません。

旋覆花（をぐるま）

旋覆花は、菊科の多年生草本で、水田に近い處に自生し高さ二三尺に達し、夏日莖頭に二三の黄色の頭狀花を着けます。生花として大抵行の花形に一種生けとするか、或は他物の根締に使ふことも出來ます。

煎秋羅（せんおう）

煎秋羅（又は仙翁）は撫子科に屬する多年生草本で、普通觀賞用として園養せられます。莖の高さ一二尺に達し、夏日莖梢に花梗を分つて深紅色の花を數個開きます。生花としては一種生も差支ありませんが、多く他物の根締として用ひられます。

夾竹桃（けふちくたう）

夾竹桃は夾竹桃科の常綠樹で觀賞用として栽培されます。高さ一丈二三尺餘に達し、七八月頃梢頭に複總狀をなして、白、淡紅、或は紫紅色の花を開きます。生花では主として一種生として、眞・行・草何れの花形にも生けられますが、就中行の姿が最も相應しいのであります。

鬱金蕉（うこんしよう）

鬱金蕉は柳草とも稱へられ、山野に自生する多年生草本で高さ丈餘にも及び、葉は互生で幅狹く長く恰も柳の葉のやうであり、幹は直幹であるが莖頂は靡き氣味であります初夏の頃、莖の頂に無數の黄色花を穂狀に咲きます。生花としては、直出生のものでありますから、其の自然に倣つて、眞から行の花形に主として一種生といたします。

鶏冠（けいとう）

鶏冠は莧科の一年生草本で、高さ三尺位に達し、莖は直ぐに育ち七八月頃、莖頭鶏冠狀の面に多數の青・黄・白などの小花を着けます。生花としては眞・行・草に大抵一種生とし、又は他の草花を根締とし、或は他物の根締めとして用うることもあります。

川穀（じゆずだま）

川穀は禾本科の多年生草本で、河畔などに自生いたしますが、莖は叢生して四五尺に達し、直幹にして葦のやうに節々から芒の如き葉を生じます。而して夏秋の頃葉腋に花を開き、花後白質球形の果實を生じます。生花では垂れ物として扱ひ、根締に季節の草花を配し、主として行の花形に生けるのであります。

葛の花（くずのはな）

葛は山野に自生する纏繞性多年生草本で、蔓の長さ二三丈にも達し、葉は三つの小葉に岐れ、秋日その葉腋に五六寸の穗を出して、紫赤色の蛾形花を綴り花後莢を結びます葛粉はこの根より製します。蔓物でありますから、生花では二重の上、掛・釣などに草の姿に生けるのであります。朝顔と同樣他の物を手として之に絡ませて生けますが、蔓は左卷としなければなりません。

藤袴（ふじばかま）

藤袴は菊科に屬する草本で、多く原野河畔などに自生し高さ三四尺に及びます。莖葉共に紅紫色を帶び、初秋淡紫色の小花を繖狀に綴ります。姿は一寸女郎花に似て居りますが、それよりは莖枝も短かく弱々しく、花は香氣を放つものであります。生花としてはすべて置生とし、大體女郎花同樣に取扱ひます。

雁來紅（はげいとう）

雁來紅は莧科の一年生草本で高さ凡三四尺に及び、四月頃發芽して七八月頃より漸次莖頭の葉が紅色となり、雁の來る頃に至つて紅最も多くなり頗る美觀を呈するものであります。生花では主として置生とし、一種生としても美しいものではありますが、矢張り他の草花を根締として挿合すべきであります。

百日草（ひやくにちさう）

百日草は菊科の一年生草本で、莖の高さ二三尺に及び、葉は對生しその葉腋より枝を分ち、枝頭に花をつけるのでありますが、花に白・紅・紫・黄・樺色などあり、又一重八重などいろ〳〵あり、花季は大變長く七月中頃から十月末迄咲き續けるものであります。生花では主として行の姿に一種生とし、又他物の根締に用うることも出來ます。

月見草（つきみさう）

普通に月見草と稱へてゐるものは本當は待宵草と稱へるものでありまして、河原や海濱の砂地によく自生し、高さ一二尺に達し、夏の夕景に及んで黄色の花をつけます。陸草でありまして、生花では主として行の姿に一種を生けるもよく、又芒などの根締として挿合せるも洵に風情あるものであります。

金魚草（きんぎよさう）

金魚草は庭園などによく栽培される玄參科に屬する多年生草本で、高さ二尺位に伸び、節々に葉を對生して、夏の頃梢上に白色又は紅紫色の筒形五裂の合瓣花を開きますがその花の形が丁度金魚に似てゐるので、この名が稱へられるといふことです。生花としては主としてこの一種を行の花形に生け、又他物の根締としても使用します。

八月の花

秋海棠（しうかいどう）

秋海棠は秋海棠科の多年生草本で、多く庭園に植ゑて觀賞します。春日地下莖から芽を生じ、莖は高さ二尺ばかり

に達し、枝を分つて葉を互生します。而して秋に至つて、枝梢の葉腋から數花枝を出し、可憐な紅色の花を開きますが、莖葉と共に優艶にして風情ある植物であります。生花としては、行の姿に一種生とするのが最もその風情を表はすに效果的であります。

曇華（だんどく）

曇華は曇華科の多年生草本で觀賞用として栽培されます。高さ間餘に達し、葉は芭蕉葉に似てそれよりも小さく夏のはじめより秋にかけて葉中に一莖を抽き、その頂きに紅、淡紅、黃、絞り等の花を總狀花序に開きます。生花ではすべて一種生の置生とし、眞・行の花形が最も相應しいのであります。

金線草（みづひきさう）

金線草は山野竹林などの蔭地に自生し、高さ二三尺に達し、夏秋の頃疎穗狀に小花を開きますが、その花は紐の如く長くして上方が紅く下方が白色で恰も水引のやうである處から此の名があります。葉は卵形で莖は至つて曲多く野趣味豐かな素材であります。生花では他物を根締として挿合せるも差支ありませんが、一種生の方が野趣深いものであります。

鳳仙花（ほうせんくわ）

鳳仙花は鳳仙花科の一年生草本で庭園に栽培されます。莖は凡そ二尺位に達し、八月頃葉腋に紅、白、絞り等の小花を開くものであります。生花では主として行の姿に多く一種生として用ひますが、他物の根締としてもいゝものであります。

山梗菜（さはぎきよう）

山梗菜は原野山中などの濕地を好んで自生する多年生草本で、莖は直立して二尺より三尺位に達し、葉は桔梗の葉に似て互生し、八九月頃莖頭に紫色の小花を總狀に綴つて開きます。生花ではこの自然に倣つて主として眞の花形に一種生として多く用ひられます。

紫苑（しをん）

紫苑は菊科の多年生草本で、觀賞用として庭園に栽培されます。春、舊根より葉を叢生して莖を抽き、初秋の頃莖頭に繖房狀をなして小枝を分ち、菊花狀淡紫色の小花を多數に開きます。生花としてはその出生に從つて一種生として用ひます。

紫藥荆（おしろいばな）

紫藥荆は紫藥荆科の多年生草本で通常庭園に培養されます。莖の高さは三四尺に達し、多く枝を分つて繁茂し、八月頃、紅色或は黃色又は白色の小花を簇生いたします。生花では行の姿に一種生けとし、または他物の根締として用ひます。

蜀羊泉（ひよどりじようご）

蜀羊泉は茄科の蔓性多年生草本で、葉は朝顏に似て居ります。八九月頃白色五裂の花を開き、赤色球形の果實を結びます。生花では普通蔓物同樣に取扱ひ、大抵一種生として草の花形に生けられます。

芙蓉（ふよう）

芙蓉は葵科に屬する落葉灌木で、五月頃發芽し高さ間餘に達し、八月頃に至つて、木槿の花に似た、單瓣淡紅色の大きい花を開きます。生花としては通用物として扱ひ、主として行の花形に一種生といたしますが、或は根締として他の草花を挿合せてもよろしいのであります。

鳳毛（るこうさう）

鳳尾は旋花科の一年生草本で、莖は蔓狀をなし、長さ二丈にも達し、他物に纏絡して成育し、七月頃から深紅色の小花を開きますが、花葉莖共に洵に優美なものであります生花では、釣舟又は掛等に草の花形に相應しいものであり

ます。

地榆（われもかう）

地榆は薔薇科の多年生草本で、到る處の山野に自生し、莖は直立して四五尺に達し、葉は長楕圓形にして對生し、八月頃莖頂に穗狀をなして茶褐色の小花を開きます。生花では通用物として扱ひ、行の花形に生けるが相應しく、又野菊などの優しい草花をこの根締として挿合せれば風情があります。

刈萱（かるかや）

刈萱は山野に自生する多年生草本で、春四月頃莖葉を叢生し、八月頃莖の高さ四五尺に成育し、その莖頭に白色の小花を穗狀に開きます。生花では垂物として扱ひ、行又は草の姿に優しく生けます。或は女郎花、桔梗、河原撫子、野菊等と交生にしてもよく、又野菊や撫子等を之が根締として挿合せても風情あるものであります。

九月の花

菊（きく）

菊は菊科に屬する多年生草本で、元產は支那でありますが、我が國に移されて已に幾百年その間園藝的改良に改良をされて、今日では純國產の名花となつて居ります。その種類多く大別して大輪、中輪、小輪、單瓣、重瓣など殆ど四季を通じてありますが、何としてもその季節は秋で、天高く氣淸く、月の影身に泌みて、吹く風庭の梧桐を叩き、園生の千草、秋の哀れを打喞ち、霜に醉ひ露に燒かるゝ頃しも唯だ獨り、超然として淸香を薰ずる樣の尊く、籬下愛すべき色を染め出すものは、誠に此の菊花でありませう。我が國に於ては、皇室の御紋章に用ひらるゝほどの、至極目出度い、實に高雅な花で、上は九重の深き雲の邊より、下はいぶせき賤が伏屋に至るまで、此の花を賞愛せざるものとてはないのであります。

花の色は黃を原色とするのでありますが、白、黃、紫、樺、茶褐、斑入など園藝的變種が限りなくあります。この他に春菊、梅雨菊、夏菊、寒菊などあり、季節々々に年中咲き誇るものであります。生花に於ては、それ〳〵その季節に應じて生けられますが、眞・行・草何れの花形にも適し、その自然の姿より見て、大輪中輪菊は眞又は行の姿相應しく、小菊の類は行若しくは草の花形によく生けられます。

黃櫨（はぜ）

生花で黃櫨といふのは所謂夏はぜの事で、石南花科の落葉灌木であります。多く、山林中に自生し高さ間餘に及び葉は楕圓形又は長卵形で、初夏の頃梢上に淡黃帶褐色の小花を穗狀に綴りますが、これは美しいものでなく、却つて中秋に至つて葉が紅葉して美觀を呈するものでありまして生花では之等の點を賞し、綠葉、紅葉共に用ひます。花形は行の置生が最も相應しいのであります。

龍膽（りんどう）

龍膽は山野に自生する多年生草本で、直立して高さ二尺位に成育し、葉は披針狀無柄で對生して莖を抱き、秋日、莖頭葉腋などに紫碧色の桔梗に似た可憐な花を開きます。生花としては一種生けもよろしいが、他物の根締としても相應しいものであります。

紅葉（もみぢ）

楓樹は楓樹科に屬する落葉喬木で、春日發芽し、五月頃に至つて小花を開き八九月頃に至つて實を結びますが、晩秋の頃紅葉して春の花をあざむく美觀を呈し、だん〳〵落葉するのであります。生花としては大抵この紅葉の季節を以ていたします。尙秋になつて紅葉する錦木、黃櫨、眞弓なども、すべて普通の花同樣の取扱ひをするものでありますが、特に楓樹の紅葉したものに限り『紅葉』と稱へ、傳花として特別の生方をなすものであります。

烏頭（とりかぶと）

烏頭は山地原野に自生する菊科の種類で高さ二三尺に及び、葉は紅葉の如く五裂し、九月頃紫色の花を總狀に綴る毒草であります。生花では行の姿に生けるのが最も相應しいのでありますが、毒草でありますから、餘り好んでは生けられません。

落霜紅（うめもどき）

落霜紅（又は梅嫌）は冬青科の落葉小喬木で、山野に自生しますが觀賞用として庭園にも栽培せられます。莖の高さ丈餘に達し三四月頃新芽を出し、五六月頃淡紫色又は白色に紅暈ある花を葉腋より簇出し後實を結びますが、この實は九、十月頃紅熟し落葉後は更に鮮紅色を呈し頗る美觀を極めます。生花ではこの實の美觀を賞し、實物として扱ひます。從つて根締として當季の草木の花を挿合すことになつてをります。

芒（すゝき）

芒は禾本科に屬する多年生草本で山地原野に自生し、毎年宿根から莖葉を生じ高さ間餘に達し、幅狹く長い葉を生じ、秋に至つて莖頭に長き穗を出し黃褐色を呈します。所謂尾花はこれであつて、秋の七草の一つに算へられて居ります。芒は直立して生育するものでありますが、その葉は前後左右に垂れ下るので、生花では之を垂物として扱ひ、必ず菊又は桔梗などの當季の草花を根締に使つて花形を整へることになつてをります。

十月の花

南天（なんてん）

南天は小蘗科に屬する常綠灌木で、山地に自生しますが專ら觀賞用として庭園に栽培せられます。幹の高さは普通五六尺から丈餘に及ぶものもあり、葉は羽狀複葉で、五六月頃に白色五瓣の小花を攢簇し、花後球形の實を結び秋に至つて熟します。その色に赤色を普通として白色又は黃色などがあります。生花では、この實の美しさを賞して實物として用ひます。從つて必ず他物の根締を配して扱ふことになつて居ります。

茗の花（ちやのはな）

茶は山茶科に屬する常綠灌木で暖地によく成育し、樹幹は四五尺に伸び枝葉頗る繁茂いたします。中秋の頃から白色單瓣の小花を開きます。此の花は大して美しいものではありませんが、淸雅の趣を備へてゐますので、生花としてもよく用ひられますが、それには行草の姿に一種生けが最も相應しく根締に他の草花を挿し合せてもよろしい。

萬年靑（おもと）

萬年靑は山谷に自生する多年生の陰性草本であつて、初冬の頃瑪瑙の如き美しい美を結び、殊に其の葉が雅趣に富んでゐますので、庭園に栽培しまたは盆栽として觀賞せられます。種類は頗る多く、中には葉に白の緣あるもの、縞、斑入等種々變つたものがありまして、何れも初夏の頃白色の花を開きますが、これは餘り賞するに足りないものであります。葉は數年枯れるといふことなく、漸次新葉が加はつて十幾枚にも達しますが、それは極めて規則的に生れ出で、秩序正しく成長するものであります。卽ち年々新しく生れ出る葉が高く伸び上るにつれて、老葉は漸次垂れ下つて其の地位を變へること恰も一家相續の意を偶し、また眞紅の實を生ずること子孫繁榮の象を表はすのであります。生花ではこれを賞して傳花として特別の取扱ひをすることになつて居ります。

茶梅（さざんくわ）

茶梅は山茶科に屬する常綠喬木で、暖地では山野に自生いたしますが、多くは觀賞用として庭園などに栽培されます。幹の高さは丈餘に達し老樹に至つては相當大木をなすものも尠くありません。花は晩秋から翌春迄咲き續けま

すが、その色に淡紅、濃紅、白色、絞などあり、又單瓣及び重瓣があり相當に美しいものであります。生花にはその花の季節に、主として行の花形に生けられますが、材料に依つては眞・行・草何れに生けても差支ありません。又個性上から一種生が最も佳いのでありますが、これに他物を根締として配するも風情あるものであります。

殘菊（ざんぎく）

生花で殘菊と稱へるのは、中輪菊以下の小菊の盛り期を過ぎた頃、霜雪に當つて葉萼が十分に發育せず、それに咲き遲れの花が、物哀れに咲き出たもゝことでありまして、特種の菊がある譯ではありません。それで生花ではこの物哀れな風情を姿の上に生け表はすのであります。

時鳥草（ほとゝぎす）

時鳥草は百合科に屬する多年生草本で、山地に自生し、五月頃宿根から發芽して高さ三四尺位に達し、十月頃に至つて、恰も時鳥のやうな形をした淡紫に斑點ある濃く佗しい小花を葉腋毎に開くものであります。生花では主として行・草の姿に一種生とするのが相應しく、又他物の根締としても面白いものであります。

十一月の花

實紫（みむらさき）

實紫は、大體落霜紅に等しい木本で、株をなして簇生し高さ間餘に達します。五月頃その枝々に無數の小花を開き十月頃、落霜紅の實よりは稍や小形の紫色の實を、枝の垂れ下る位一面に着けるものであります。生花では實物として多く行の花形に生けられます。

蔓梅嫌（つるもどき）

蔓梅嫌は衛矛科に屬する蔓性の落葉攀緣灌木で、山野に自生し、その蔓は互に纏ひ合ひ或は他の木に卷絡（左卷）して成長いたします。六月頃小花を開き、花後圓形の小果を結び、十月頃黃色となり、なほ外皮破れて中に赤色を見せますが、その頃となりますと、落葉して實のみ殘り頗る美觀を呈します。生花ではこの實を稱して、蔓物の實物として扱ひ、二重の上、掛、釣などに草の姿に生けるのであります。

錦木（にしきぎ）

錦木は衛矛科に屬する落葉灌木で、四月頃發芽し、五月に白色の小花を着け後結實し、十月頃熟して黃赤色の種子を露出いたします。幹は相當大きくなり、枝は對生で、而もその幹枝に硬皮質の縱翼が恰も、矢の羽が附いて居るやうに密生し一種變つた風趣を備へてをります。又その葉は十一月頃最もよく紅葉し頗る美觀を呈します。生花としては、この錦のやうに紅葉した時を最も佳といたしますが、落葉後も幹の雅致を賞して用ひます。花形は主として行の姿に生けますが、これは實物に屬しますから、必ず根締に他の草木の花を挿合せることになつて居ります。

十二月の花

枇杷（びわ）

枇杷は薔薇科に屬する陰性の常綠喬木で、果樹として專ら園圃に培養されますが、樹幹は年を經て相當の大きさに達し、初春の頃新芽を出し、冬日帶黃色の小花を總狀花序に開き春になつて球形の實を結び食用に供せられます。生花としては專ら十月頃から十二月頃の花の季節に用ひます花形は眞・行・草何れにても差支なく葉を巧く活かして生けますと洵に古雅なものであります。

猿猴杉（えんこうすぎ）

猿猴杉は松杉科の陰性常綠木本で、山地に成育するものでありますが、その枝條が長く伸び、恰も猿猴が手を伸ばしたる如き風情があるので、この名があるのでありましてこの異樣な趣が却つて觀賞されて庭園に植ゑられる所以であります。生花に於てもこの點を賞し四季を通じて素材と

して用ひます。花形は行・草いづれにも生けられますが、花の無いものでありますから、必ず當季の草木の花を、これが根締として挿し合さなければなりません。

蝦夷松（えぞまつ）

蝦夷松は松杉科の常綠喬木で、北海道や樺太などの寒帶地方に多く產し、大體松に似て居ますが、その枝は何れも下垂の狀を呈し、特に總の如き苔が寄生してゐて雅趣に富めるものでありまして、僅かに數尺の倭樹に於ても同樣の趣を示し、その風姿は恰も大木を想はせる感があります で生花に於ても此の風情を賞してよく用ひます。而してこの木は割合に直ぐに育つものでありますから、眞又は行の花形に生けるがよろしいのであります。然し常綠樹で、花の無いものでありますから、必ず當季の花物を根締としてこれに配する事を忘れてはなりません。

檜柏（いぶき）

檜柏は松杉科に屬する常綠喬木で、幹は聳立し、葉は小鱗片狀をなし、枝葉のよく繁茂するものであります。華道では松・檜と共に三木として數へられ、常綠樹中最も品位あるものとされてゐます。生花としては四季通じて用ひられますが、花のないものでありますから、必らず他の花物を以て之が根締としなければなりません。

矮檜（はひびやくしん）

矮檜は山地に自生する松杉科の稍や蔓性を帶びた常綠灌木で、這杉、そなれ等とも稱へられる檜柏の變種で葉は針狀をなして居ります。而してこの木は直立することなく、横に這ひ廣がるものでありますから、よく庭園泉水の附近などに栽培して觀賞されます。生花としては年中用ひられるもので、二重の上や掛・釣等に草の姿に生けられるのでありますが、之も花がありませんから、必ず他の草花を之が根締として挿合せることに定められて居ます。

昭和十一年十二月 廿三日印刷
昭和十一年十二月廿八日發行

新刊 池坊生花教本
下卷 金壹圓

著作者 三浦晃
發行者 大日本花道學院主事 三浦晃
印刷者 株式會社似玉堂代表者 福井松之助 京都市柳馬場三條南

發行所 京都市柳馬場三條南
大日本花道學院
振替口座大阪五三五七九番

不許複製

342
954

終